

「川の向こうは未知の世界なの」

窓際で水を飲む僕に、その声が届いた。この言葉を聞いたのは、確か二日ぶりくらいだった気がする。机に片肘をつけて、壁の向こうのどこか遠くを見つめる彼女は、かなりの頻度で川の向こうの話をする。川の向こうに待つであろう、羨望の話。それもいつも、誰に話しかけるでもなく、ただ自分に言い聞かせるようにする。

太陽が沈んでから、少し時間がたった。だから今は、きっと十八時の少し前くらいだ。人々の一日が終わる時間。この丘のふもと、川下にある街からは、人影がだんだんと減って行って、そして家々からはほのかに明かりがこぼれだす。ちょうど北側にある大きな森には深い静寂が張りつめて、風の音だけが不気味に響き始める。

夜が始まる時間——彼女たちの時間だ。

この小屋の部屋という部屋から、地下室から、そして窓から見える洞窟から、ざわざわと一斉に動き出す音がした。十人、二十人、もうしばらくしたら、数えきれないほどになる。この小屋の近くに何人住んでいるのかを、僕も実は把握できていないくらいなのだ。

動き始めた彼らの殆ど(ほとんど)全員が、それぞれ似通った黒基調の外套(がいと)姿。だから少し暗いところに紛れられると、近くに顔を寄せなきゃ一人ひとりを見分けるのは難しい。風の音しか聞こえない夜の世界では、彼らの足音や声だけがその存在を主張していた。

やがて彼らの移動が終わって、この部屋にも静けさが戻ってくる。

僕は知っている。それを合図にして、彼女はいつも、必ず最後にこの小屋を出る。よいしょと椅子から立ち上がって、いってきますと言って、この部屋を出る。暗闇が支配を始めた外の世界へ行く。そして夜が明ける直前に、必ず元いた場所、ここに帰ってくる。だから僕は、彼女たちの帰りをここで待つのだ。

窓から見えた黒ずくめの影たちが、辺りを包み始めた暗闇にだんだんと同化しようとしている。この小屋の近くを静かに流れる川を前にして、彼らは立っていた。その集団の中心に、さっきまでこの部屋にいた彼女が走っていく。腰くらいまで伸びた長髪を後ろで一つに束ねていた彼女は、仲間たちに何か指示出しをしているようだ。

——川を埋める。そして、その向こう岸へ行く。それが彼女たちの目的。

ただ渡るだけではいけない。わずかな時だけでいいから、川の流れを止めなければならない。だからその一部でも、埋めなければならない。そうしなければ、彼女たちはその先には行けない。向こう側にあるという、未知の世界を見ることは叶わない。

彼女たちは、流水を渡れないから。

「吸血鬼」というのは、そういう種族だからだ。

川を泳ぐことは言うまでもなく、流れの上を渡るだけでも、彼女たちは息を失ってしまう。間違っても川に落ちたらそれで終わり。それでもう幾人もの仲間を失っていると聞いた。だから、どうにかして橋を架けるだけでは届かない。一応舟には乗れるらしいが、誰も操縦できないので危険すぎて使えない。

だから彼女たちは、腕づくでその障害を埋めようとするのだ。その手にはシャベル、鍬(くわ)、押し車、様々な道具たちがある。それらを武器に、彼女たちは大なる自然に立ち向かう。

誰から見てもこれは無謀だ。

だけど僕は、彼女たちを止められない。彼女たちが、そうしなければいけないことを知っているから。

彼女たちの一日が、今日も始まる。

夜が明ける少し前に、いつものように僕は目を覚ました。彼女たちが帰って来る前に起きて彼女たちを待つのが、今や習慣となってしまった。

日光に弱い吸血鬼は、夜が明けるまでには太陽を遮(さえぎ)れる場所にはいないといけない。外で掘り続けている洞窟には、まだ仲間の全員は入れないから、入りきらなかった吸血鬼たちがこの小屋に暮らしている。だからもし玄関の鍵が開いていなければ、屋根の下に入れられない彼らは日光に殺されてしまうのだ。

階段脇から玄関を見ていると、だんだんと周りがざわつき始めてきた。それに気づいた次には、玄関扉ががたんと開き、吸血鬼たちが数人なだれ込むように入ってくる。それに続くようにぞろぞろと土をつけた吸血鬼たちが玄関を踏む。そのうちの何人かが僕の顔に気づくけれど、何の反応も返さないまま廊下の奥にある地下室にせかせかと引っ込んでいった。地下室は元々なかったけれど、勝手に彼女の仲間が床下を掘って作ってしまった。元々物置にされていた部屋も全て彼女たちの居住区にされていて、まさに小屋全体をとられたという状態だ。

「今日もだめ一口ウ君」

そしてそうわざとらしく作った声で僕の名を呼びながら、いつものように彼女、リタがこの小屋に帰還した。彼女はいつも最後にこの小屋に入ってくる。それを確認した僕は、玄関の鍵を閉め直しておいた。どうやら今日も川との勝負には負けてしまったらしい。

進展も成果もない報告が、彼女たちが来てから毎日続いている。それだけ自然は強いのだ。人間よりも、吸血鬼よりも。僕たちにとって、自然は神に近いものだから。

それでも、茶目っ気を出せるくらい余裕があることに、僕は少し安心した。こんな顔をしている時は、仲間を失っていない時だから。仲間が川に落ちた日、帰ってきてから一人で泣いていた彼女のことを、僕は知っている。

小屋の周りに広がっていた喧噪(けんそう)は、気づけば少しずつ遠くなっていた。きっと仲間たちも、部屋に、そして外の洞窟に戻っていったのだろう。廊下の向こうも、もうしーんとした静寂に包まれている。彼らはもう、夜になるまでは出てこない。

その誰もいない空間に二人分の足音を響かせて、僕たちは二階にある居間に歩く。一番広い部屋だけど、ここには僕たち以外には誰もいない、二人だけ。ろうそくの一本も立っていない真っ暗な部屋を、僕は壁沿いに窓際に向かって歩く。吸血鬼は炎が苦手だと言っていたし、火をつけることが敵対の意志に思われるかもしれないと思っているから、この部屋に灯りはない。それでもここにずっと住んでいるから、暗くても多少は歩けるし、どこに壁や家具があるかもだいたい分かる。

僕がようやく窓際の壁に到達して、そこに背を預ける。それと同時に、彼女はもううんざり、といった声で愚痴を吐き出した。

「いくら土を入れても、すぐに流されちゃうの」

「それはそうだ」

椅子に勢いよくもたれかかりながら嘆くリタに、僕は苦笑した。

「もう少しましな手段はないの？」

「考えてはいるけどー」

広すぎる。彼女が続きを言わずとも、その難しさは理解できていた。

あの川はこの国の国境線になっていて、僕の知っている限りでは、この国の川の中で幅が最も広い。川下の街のさらに向こうにある、国同士を繋ぐたった一本の橋は、渡りきるのに十分くらいはかかるらしい。もちろん森に流れるせせらぎなどは全くの別物で、土を流し込んでどうにかできるような規模じゃない。彼女だってそのことは分かっていて、けれど、今はそれしかできないのだろう。これほど大きな水流と対峙(たいじ)するのは初めてらしいから。

別のルートはないのかと以前聞いたけれど、この国の南には海が、東西には大きな川が、そして北には山脈がそびえていて、不幸にも自然の要塞と化している。唯一北には行けそうに思えるが、日光を妨げるものが少ないから、危険だと考えているとのこと。

ではどうすればいいのだろうか？ 僕がうーんと首をひねっていると、リタはくるんと僕の方に顔だけ向けてくる。暗くてよく見えないけれど、きつと得意げな顔をしている。

「じゃあさ、明日は土じゃなくて、木を入れてみようと思うの」

「なるほど。でも木片程度じゃ流されそうだけど」

自信ありげな声色で放たれたリタの案に対し、いきなり冷や水を浴びせるような言葉を返してしまって少し後悔する。だけど彼女はそれを意に介さない。むしろ待ってましたと言わんばかりに椅子からがたっと立ち上がり、僕がいる窓の方に軽やかに向かいながらも熱弁する。距離がかなり縮まって、予想通りの得意顔が目の前に。

「その森にある杉の木、一本まるごとならどうかしら。それなら流されないと思う」

「のこぎりあったっけ」

「必要ないわ。根っこから引き抜けばいいのよ。ぽんと」

リタはそう言って引き抜くような手振りを見せつける。それを見た僕は、発想自体には一理あるとは思いつつ、それ以上に驚きの方が先んじていた。

確かに吸血鬼という種族は、人間よりも力がある。人間にはどう考えても大木を引っこ抜くのは無理だけど、吸血鬼ならばできるかもしれない。

それでも、目の前で胸を張り得意げな表情を向けるリタは、別段体格がいいようには見えない。それこそ町娘より少しましという程度。体全体が引き締まっていて、スタイルはいいように見えるけれど、木を持ち上げられる肉体ではなさそうに思える。

もちろん、彼女一人でやるわけではないし、男の吸血鬼がやって彼女は後ろで監督か、あるいは応援をするのだろう。けれど、彼女が大木を一本持ち上げて、よたよた川に向かって歩いてる姿を想像して、吹きだしそうになってしまう。なんとかこらえたけれど、彼女の赤色に光る目が、僕に不満を訴えてきていた。

「私だって一本くらい行けるわ」

ぐっと顔を近づけて、膨れながらもそう文句を言うと、今度は僕に向かって力こぶを見せるようなポーズをとる。けれど白い長袖シャツに隠れて、服の上からでは筋肉があるのかないのか分からずに、僕はどう反応を返せばいいか困ってしまう。

「あっ信用してない」

またも目線と表情で不満を訴えるリタに謝っておく。でもそんな場当たりの謝罪では満足しなかったらしく、明日そこで見てろ、と僕に挑戦状を叩きつけて、颯爽(さつそう)と部屋から出て行った。吸血鬼は日中眠る。彼女も部屋に帰って、窓一つない暗闇でこれから眠る。

少し広い部屋に取り残された僕は、誰もいないことを確認してカーテンを開けた。北にある山の向こうから、太陽の光が漏れていた。あと十分もすれば日が昇って、彼女たちの時間が終わる。彼女たちが動けるのは、およそ十時間程度。そのうちリタと話した時間は、だいたい三十分くらいのはずだ。昼も夜も動ける僕は、少しずつ大きくなる太陽を見ながら、その時間の短さを感じずにはいられなかった。

彼女たちが眠っている間に、僕は川下にある小さな街に出た。小屋から歩いて三十分。ようやくこの国の兵士たちが守る正門に着く。生活用品の調達のために、だいたい週に一回くらいの頻度でこの門をくぐっている。以前来た時よりも、赤い鎧を着た兵士が増えて、物見やぐらが大きくなっている。誰の目にも分かりやすいくらいに、彼らは警戒の姿勢を明確に見せつけていた。

吸血鬼がこの近くにいる。

獰猛(どうもう)で冷酷な死神がいる。

この街の地下に潜伏している。

違う。あの山のふもとにいる。

病院の血液が狙われる。

若い子供の血を好む。

噛まれると吸血鬼になる。

あちらからもこちらからも、吸血鬼の話題が聞こえてきて、警戒対象が何かを明白に示し続ける。その住民の噂話は、真偽が分かるものも、分からないものも混じっていた。もしかしたらリタの仲間がこっそり夜な夜な襲っているのかもしれないし、リタもまた小さい子供の生き血を吸うのかもしれないと考えて、思わず首を振ってその想像を吹き飛ばす。

彼女たちが僕の小屋に来てから、もう一週間と少しくらいたっている。住んでしまえば意外なことに、吸血鬼と生活するのもかなり慣れてしまっていた。日が出ている時間や雨の日には外を出歩けないことも、ろうそくや松明(たいまつ)が苦手なことも、獣の血を飲んで生きていることも、いざ知ってしまえば特に抵抗感を感じなかった。そしてまだ短い時間ではあるけれど、一緒に過ごしたことで吸血鬼についての多くのことを知った。噂話よりも、学術本よりも本物の彼女たちの姿を知った。

でも思えば、それだけの時間を共にいながら、僕は彼女たちのことを殆ど知らない。噂話の一部の真偽すらも分からないくらいに、僕が知っているのはわずかなことだけ。

この国の中心にある首都から、森を抜けて逃げてきたこと。力は強いけれど、それ以上に多くの弱点があること。だから抵抗できずに、人間たちに迫害され、元の住処を追われたこと。逃げ延びる中で、何人もの仲間を失ったこと。だから安住の地を求めて、別の国に行こうとしていること。だから越えられない川を越える必要があること。

そして吸血鬼の多くは、人間なんて大嫌いなこと。

吸血鬼たちが来て一日目の夜、どれもリタの口から告げられたことだ。

リタは人間の僕相手にもこのこ近づいてくるけれど、彼らの殆どは僕と暮らしていることをよく思っていないだろう。同居してから一週間もたっているのに、僕は彼女以外の吸血鬼と言葉を交わしたことがないのだ。

それだけならまだよくて、彼らの中でも特に過激な吸血鬼たちは、人間なんて殺してしまえと思っているという。だから無暗に詮索しないように、彼女から釘を刺されている。もし彼らの近くに行けば、きっとあなたは殺されてしまうわ、と忠告されている。

だから僕も、リタ以外の吸血鬼とはなるべく話さないようにしている。僕のことを殺してしまいたいほど憎いなら、それを刺激してあげない方がいいと思ったから。

——それでも、彼女たちを小屋に住ませている理由は何か。

彼女が初めて小屋のドアをノックした時、もう朝を迎える寸前だった。今にも泣きそうに、くしゃくしゃな顔をしながら家に入れてと訴える彼女たちを、僕は拒めずに招き入れた。吸血鬼だと気づいたのはその後のことで、ひどく驚いたのを覚えている。

彼女たちは本来、一度招かれた家しか入れない性質があるらしい。だけれど僕はそんなことも思い当たらずに受け入れた。当然、人間嫌いの吸血鬼の中には、小屋の主を殺してしまいたいと思った吸血鬼もいた。でもそう思っている殆どが、人間の小屋なんかに入ることを拒んで近くに見つけた洞窟に身を寄せた。だから、まだ小屋に入ったことのない彼らを間違えて招き入れてしまわなければ、少なくとも僕の命は守られる。

そして幸運なことに、小屋に入れる吸血鬼たちにも襲われることなく、まだ僕は命がある。助けた恩で見逃してもらっているのか、僕が人間であることを恐れて手を出せないのか。その辺りは分からないけれど。

ともあれ僕は、その危うそうに見える状態に今も身を置いている。いつリタたちが豹変(ひょうへん)して、僕を襲うかも分からない。逆に彼女たちからすると、僕が突然松明や十字架で武装して、襲ってくるかもしれないのに。なのはどうして、僕たちは一緒の小屋に住んでいるのか。

一度入れてしまった彼女たちをほっとけないという義理人情か、逆らったら殺されるかもという恐怖感か。それとも、僕はリタに一目ぼれでもしてしまったのだろうか？

僕自身の中でも、その答えはまだ整理しきれていない。でも、そんな理屈を離れた理由があるような感じはしている。それは何だろう？

ぐるぐると考え出してしまっていて、結局分からないまま時間が過ぎていく。僕の横を、数えきれないほどの住人たちが素通りする。もやもやしたまま一通り用事を済ませると、街の中心にある時計台が、もう街に一時間近くいるという事実を僕に突き付けた。太陽はもうてっぺんに到達して、誰にも悟られることなく沈み始めている。片手にいっぱい布の袋を提げて門を出ると、門番の若い兵士から夜の独り歩きに気をつけろよとの挨拶をもらって、条件反射的にお礼と笑顔を返した。

空は雲一つない晴天で、川の向こう岸にはピクニックに行く家族連れが、南の方へと歩いていくのが見えた。冬なので日差しは暖かくていいけど、彼女たち吸血鬼のことを思うと少し複雑な気分にもなる。もし太陽がなければ、彼女たちは四六時中動けるのにと。

そうすればもっと早く、彼女たちは向こう側に行けるかもしれないのに。安住の地を見つけられるかもしれない、そして今より幸せになれるかもしれないのに。

でももし、例えば、吸血鬼が日光を克服したら、地上に出た彼らの多くは容赦なく人間を襲うかもしれない。そうなれば戦争だ。どちらもただでは済まないだろうし、どちらかが絶滅するまでやるだろう。その時、最後に立っているのはきっと人間だ。

そして人間への思いが中途半端なりタたちのような吸血鬼が真っ先に、殺されてしまうだろう。弱点の一つである銀の弾丸や剣で貫かれて。そして、見せしめとして胸に鉄の杭を打ち付けられてしまうかもしれない。

——人間と吸血鬼は、どんな関係にあればいいのだろうか。

究極的な疑問が、僕の頭を支配して、くっついて離れない。その答えが浮かぶ前に、歩き続けた僕の足はもう小屋の入口に着いていて、そこで一旦考えるのを諦めた。分からないことだらけで嫌になる。

**60/12/15

昨日彼女から挑戦状を突き付けられたが、結局見ることはなかった。僕が見ているのを、彼らがよく思わないかもしれないから。それにリタが大木を楽々運んでいたとしても、重さに屈して尻もちをついていたとしても、僕には暗闇に紛れた彼女のその姿が見えないのだ。本当にできるのか少し興味はあったけれど、仕方ないと諦めて床に着いていた。

それでも目が覚めた僕はすぐに結果が気になってしまい、つい窓から外を覗き込む。少しだけ空が明るくなっていて、それに月光も手を貸して、何本もの大木が川に投げ入れられているのが僕の目でも確認できた。吸血鬼自慢の腕力で引き抜いたのだろう。昨日のような彼女の得意げな顔が目には浮かぶ。

しかし大木でできた堤防は、まだ向こう側に届くには距離がある。それに投げ入れたせいか木の並びは乱雑で、堤防に少しずつ空いた隙間から水が滞りなく流れ出していた。これではまだ渡れない。現に、小屋の中に吸血鬼たちがざわざわと帰ってきている音がするので、今日のところは失敗だろう。

その音が小さくなって、そろそろやって来るかと少し身構えていると、案の定いつもより勢いよくドアを開けて彼女が入ってきた。わざわざ目の前まで来て顔を近づけて、どうだとばかりに鼻を鳴らす。とりあえずすごいすごいと返しておいたが、すぐに見ていないのに適当に返したことがばれてすねられた。感情がころころと変わるので、見えて面白さがある。

これでも、彼女はあの集団のリーダーなのだ。作業を始める時も、いつも彼女は中心にいる。なのに僕と話している彼女は、どうしても子供っぽくしか見えない。だから不思議に思っていた。あの集団の中には、彼女よりも長く生きてる吸血鬼はたくさんいたはずだ。なのになぜ彼女がリーダーになっているのだろうか。

そう考えながら、むくれ顔の彼女を見つめていると、どうかした？ と不思議そうに聞かれる。慌てて何でもないと取り繕ったけど、何か言いたいことがあるんでしょ、とまた僕に迫ってきて、思わず後ずさる。窓の近くの壁に体がぶつかる。月明かりで彼女の端正な、その中にも幼さを残した顔がくっきりと見える。少しの土のにおいと、そしてそれ以上にする血のにおい。外で獣の血を吸ったんだ。彼女が吸血鬼であることを、これほどまでに再認識できることはない。

結局、彼女からそれ以上の追及を受けることはなかった。間もなく日が昇ることに気づいた彼女が、また今夜と短く残して、慌てて去っていったから。

そして彼女が行ってからも僕は、誰もいない居間であることを考えていた。

——吸血鬼とは。リタの立場とは。彼女たちの幸せとは。

昨日の昼間に考えようとしたこと、これまで彼女たちと暮らして、疑問に思ってきたこと。僕の中を支配したその問いを、無視することができなくなっていた。

昇りきった朝日も、獣くさい血のにおいも、その全てを振り切って、僕は思考の沼に全身を沈ませた。自分が何をできるというわけでもないのに、それに、何をする必要はあるわけでもないのに。

ごんごんと玄関扉が叩かれる音がする。その音がだんだん近くなってきている気がする。何回目かの音でようやく我に返った僕は、頭まで浸かった沼から抜け出した。

それにしても来客なんて珍しい、いつ以来か、と窓から見ると、玄関の前に人間の男が三人。みんな揃って赤い鎧、そのうち一人は昨日街の入口であったあの兵士の顔。残りの二人はたぶん川下の街の住人だろう、黄色と灰色の暖かそうな上着を着ている。

「川が何者かにせき止められているのだが、何か知らないか？」

扉を開けて対応すると、間髪入れずに赤鎧が聞いてきた。昨日の晩に投げ入れられた大木を、誰かが見つけてしまったのだろう。だから彼らは現場から近い僕の小屋に来た。黄色の服の男がきよろきよろと落ち着かなさそうに周りを見渡して、何か証拠はないかと探していた。

——はい、知ってます。僕的小屋に住んでいる吸血鬼がやりました。

真実はこれだ。でも今更になって彼女たちを売ろうとは思わなかったし、こうすると間違いなく僕も共犯で捕まってしまう。

妙案浮かばず、無茶とは思いつつも分からない、の一点張りで通し続けた。結局特に何事もなく彼らは帰っていったけれど、きっと僕は何かを知っている可能性がある、と付記つきで彼らのリストに載ってしまっただろう。川の近くに住んでいる人間が、川の異変に何も気づかないわけがない、と思われても無理はないのだから。玄関の鍵をがちゃりと閉めると、はあと大きなため息が出た。

対処は早いうちにといい、とりあえず寝ているリタの部屋の扉を叩く。うーんと鈍い声を出して扉を開けた彼女は、寝始めたばかりのはずなのに、長い黒髪をぼさぼさにして、もうぱっちり寝癖をつけていた。

寝ぼけ眼で僕を見る彼女に、ゆっくりと、赤鎧たちが来たことを話した。万一疑われていて誰かにばれたらことだから、この小屋や地下室の仲間たちには、しばらく外に出ないよう指示をすることに、そして外の洞窟の方には、彼女が一筆書いて僕が渡しに行くということになった。彼女たちは夜以外出歩けないし、夜まで待ったら彼らが出てきてしまうから。それに人間の僕のことを聞くか分からないから、伝文の形にするしかないとした。

夜までの安眠を邪魔されたリタは大変不服そうな顔をしていたが、すぐに手(て)櫛(ぐし)で髪を直しながら、小屋の中を早足で回っている。その姿に、彼女たちが感じている人間への脅威が垣間見えた気がした。

彼女が地下に入っていくのを見届けて、僕は外の洞窟の方へ。右手には手紙。指示があるまで出てこないように、との一筆。ところで洞窟には日光を極力入れないために、大岩でふたがされている。人間の力ではどかせないし、彼らが開けると、注ぎ込む日光で開けた者が人柱になってしまう。さてどうこの伝文を渡そうか。僕もリタもどうやら気が動転していたみたいだ。

隙間があったらそこから差し込もうと思ったが、そんな隙間も見当たらない。途方に暮れてとりあえず岩を叩いてみたが、こつこつという音だけがして、辺りに何も響かない。あまり気はのらないけれど、呼んでみるしかないかと声を出そうとしたら、中から何かくぐもった音がする。誰かが反応している。洞窟の中には響いたのか、それとも彼らの耳がいいのか。さっき彼女もノックの音だけで気づいたし、きっと人間より耳もいいのだろう。

「何の用だ人間」

その場で待っていたら、中から彼らの声がした。骨の髄に響くような低い声で、嫌悪を隠さない声色で。僕は思わず直立した。

「皆さんのリーダーからの言伝(ことづて)を」

返事がこない。疑われているだろうか。

「本当です。サインもあります」

疑われていると結論付けて、付け加えた。サインを確認する手段もないのに、やっぱり気が動転している。

「……そこで読み上げる、人間」

やっと信じてくれたのか、くぐもった返事が僕の耳に届く。ゆっくりと、彼女の一筆をサインまで含めて読み上げた。そのまま少し待っていると、了解したと伝える、としか向こうからは帰って来なかった。仕方ない、交わす言葉は少なくなって当たり前だ。向こうは僕のような人間が嫌いなのだから。

緊張で疲れながらも小屋に帰って、洞窟の彼らからの了解の旨を伝える。階段からひょこっと顔を出していたリタは、胸をなでおろしているようだった。

「よく考えたら、顔も見えないのに僕だと気づいてくれてよかった」

そう彼女にこぼすと、彼女はとたとたと階段を下りてきた。玄関の近くにまでは来ないで、階段の一段目で止まっている。玄関には、わずかに日光が入ってくるから。

「吸血鬼のにおいがする人間なんて、ロウ君しかないからね」

「確かに」

吸血鬼のにおいとは、血のにおいのことだろうか。自分で腕を嗅いで見ても、特に異臭は感じない。彼女たちにしか感じ取れないくらいのおいなのか、僕がもう慣れてしまったからなのか。そう手を見ながら気にしていると、彼女が手招きをしているのが見えた。

「むしろ今思うと、ロウ君に返事が届いたのが驚きだったなあ」

日のあたる場所を離れて、僕は彼女の隣に座る。

「知ってるとは思うけど、洞窟にいるみんなは本当に人間嫌いばかりだから。声すら聴きたくないって言うのもいるくらい」

「僕は運がよかったわけだね」

そう言うと、リタはうんうんと大きく首を縦に振る。彼女がおおげさなのか、それほどに可能性は薄かったのか。

「だから向こうのみんなとはあんまり顔を合わせない方がいいと思うよ。……会ったらきっと、食べられちゃうから」

彼女がさらっと当たり前のように続けた言葉から発せられた、今までの彼女には感じなかった冷たさが、僕の体を貫いた。

——これはきっと、本当のことなんだ。

ずっと彼女たちといて、分かっているはずなのに、身の毛がよだつような感覚が体中を走り回る。彼らと交わしたわずかな言葉から、僕は彼らの抱える嫌悪を、身を以て知ってしまったからだ。だから、食べられるとか、殺されるとか、リタから聞いていたその言葉たちは途端に現実感を帯び始めて、僕の心にのしかかってきていた。

僕は、ただ無言で首を縦に振っていた。襲い来る感情の塊を整理しきれなかった僕の口からは、うん、も分かった、も出てこなかったのだ。

その後僕らは階段に腰かけたまま、いつものように彼女と何かの話をした。けれど、その内容は殆ど頭に残っていない。ただただ何かに押しつぶされたまま、問いかけにも満足な反応を返せずにいた僕は、彼女にまた今夜という挨拶だけを、最後に絞り出すことしかできなかった。

一人で誰もいない居間に帰って、水を飲んで、ご飯を食べて、ただ窓の外を見ながら吸血鬼たちのことをずっと考えた。川の近くでは赤鎧の兵士たちが何十人も集まって、投げ入れられた大木を少しずつ切断しながら回収している。腰には銀剣と拳銃、中身はきつと銀の銃弾。胸元には十字架。まだ朝なのにこうこうと揺らめく松明の束。吸血鬼の弱点をふんだんに持ち寄った彼らが、誰を犯人と考えているかは明白だ。きっと彼らは毎朝毎晩、欠かさずに警戒態勢をとるだろう。きっと彼女たちはここから動けなくなる。彼女たちが嫌う人間によって、その歩みは止められる。人間たちは、自分たちの手によって吸血鬼をこの地に閉じ込める。誰も幸せになれない。

そこまで頭では分かっているもなお、僕に何をすることもできないのだ。眼下では、彼らが命を懸けて得た戦果が、人間の手によって簡単に取り除かされていく。その光景を、僕はただ見ているだけだった。

**60/12/19

あの後ずっと、昼も夜も赤鎧がひっきりなしに川を行き来していて、彼女たちは幾晩の間も何もすることができずにいた。赤鎧たちが現れだしたあの日から、その人数自体は少しずつ減ってきている。けれど、人数は問題じゃない。もし人間を一人殺したら、何百人と武装した人間たちがやってきて、あつと言う間に彼女たちは制圧されてしまうだろう。だから動けない。じつと耐えるしかない。

この小屋に住む数少ない吸血鬼たちも、そのことは分かっている。けれど、ここまで来たのに一歩も進めない現状が、彼らの精神を苦しめて、いらいらを募らせていた。木の柱のひっかき傷が、見る度あちこちに増えていた。そんな彼ら吸血鬼たちを、彼女は元気づけようと必死に動いている。慰めて、笑わせて、諭して。この小屋にいる全てに対して、年相応の明るい表情を向けて。

その明るさは、人間である僕の方にも向いていた。今までと同じように、僕とリタは毎日この部屋にやってきて気の済むまで話をした。彼女が外に出れなくなってから、二人で話す時間は大きく延びた。

翼はあるけど退化してしまっていて、今やもう飛べないことを知った。自分が鏡に映らないことに驚いた話を聞いた。猪の血をおいしく飲む方法を教えてもらった。旅の途中で雨に降られた時の話には心を揺さぶられた。

彼女たちが生きた世界は、どれも僕が知らない世界だった。おとぎ話を読んでいるような感覚で、一つ聞く度に吸血鬼の見える世界が、その時の彼女の感情が、少しずつ鮮明になっていった。

でも、僕の心の奥にはどうしても引っかかるものがある。どれだけ話に夢中になっても、消えない何か僕をむずがゆくさせる。本当に彼女に尋ねたかったことが、日に日に大きくなっていったのだ。

いつ切り出そうかと思いつつも、結局まだ聞くことができていない。いつもリタの話が興に乗って、僕はその疑問を出せなくなる。心底楽しそうに、無邪気に話すリタを遮りたくなくて、いつも僕はタイミングを逃して悶々とするのだ。いつ聞こうか。聞かない方がいいんじゃないか。今日じゃない。彼女の声が遠くなっていく。聞こえなくなる。時間は止まってくれない。今日も繰り返してる。

そしてふと気づいたら、机の向こう側にいた彼女の顔が、僕の目の前にあって、大きな二つの赤い目が、僕を覗き込んでいた。少ししかめつらの不満顔。頬が少し膨れているのが、この距離なら分かった。数瞬のうち、僕は椅子ごと後ろに飛びのいた。椅子の足が床をひっかいて、ぎぎと鈍い音が響く。

「今日のはつまらなかったかな」

動揺して口をぱくぱくさせる僕に、彼女は聞いてきた。反射的に首を横に振る。無意識に、おおげさな振り方になった。

「何か悩みでもあるの？ それとも気になること？」

「どうしてそう思ったの」

目の前で凶星を言い当てられて、きょどきょどとして声も詰まる。けれど、彼女の目線は僕の両目に合ったまま。

「そういう顔してたから。分かるよ、私はみんなのリーダーなんだから」

見抜かれてしまった僕は、驚いているやら、少し恥ずかしいやら、いろんな気持ちが渦巻いて落ち着かない。それでも、時間が少しずつ、そのざわめきを解決してくれた。さっき目の前まで来た彼女は、机に腰かけるような姿勢で僕の隣にいた。今なら、聞いていいのかもしれない。無暗に詮索しないようにと言われていたけれど、どうしても聞いてみたかった。

「洞窟に手紙を持っていった時……いや、その前からもずっと思ってたんだ」

僕は自然と、リタの横顔を見つめていた。

「吸血鬼は人間が嫌いだって言ってたよね」

「うん」

じゃあ。

「じゃあ、君も人間はやっぱ嫌いかい」

赤く光る目を見つめて、意を決した問いが彼女に届いた。赤い目が少し見開いたように見えた。

「リタはどれだけ、僕たち人間を嫌っているのか、聞いてみたかったんだ」

一度出てくれば後は止まる間もなく、水が流れるようにその続きが口をついた。

僕だって人間だ。彼女たちを虐げてきたやつらと、僕は同じ人間で、彼女たちの憎悪の対象だ。けれど彼女は僕にいろいろな話をして、時折笑顔さえも向けて、おおよそ嫌悪とは正反対のものを僕に見せる。そこにずっと違和感を覚えていた。納得できないという感覚が、僕の心の隅に居座り続けていた。僕に笑うその表情の裏に、何かがあるのか。

森を急に風が抜けて、甲高い音が響く。木の葉がさがさと揺れる音もする。それに構わず僕は彼女の横顔を見つめ続けていた。腕を組んで考える彼女は、今までで一番真剣な表情をしていた。時間だけが経過する。僕は何も言わない。リタの本音が知りたかったから、ただ待った。

「……好きか嫌いかわかれれば、嫌い」

絞り出すように、しかしそれでも毅然(きぜん)とした口調で、彼女はその答えを言い切った。

「でも、誰でも嫌いなわけじゃないの」

「どういうこと」

僕がそう聞き返すと、彼女は僕の横を通り過ぎて、窓の方に歩きだす。僕はただその横顔を追い続けた。

「どちらかと言えば人間は嫌いよ。私だって」

僕は、その先を聞きたいんだ。食い入るように、彼女に顔を近づけた。

「でも、洞窟や、この小屋にいるみんな程じゃないと思う。私はまだ若いから、みんなほど人間にされたことを知らないし、体験してもいないの」

それでも、僕たちを嫌う理由なんて、いくらでもあるはずだろう。現に君は、既に一回住処を追われてる。そう聞くと、嫌ってほしいの？ と冗談めいた笑みを浮かべる。窓の外に向いたその表情の全てを、僕は読み取ることができずにいた。雲一つかかっていない月は、きれいに見えるのに。

「私たちは生まれつきの弱点が多いでしょ？ だから人間から弄(もてあそ)ばれるようにご先祖様は殺されたって聞いている。十字架を持った人間に囲まれて、大量の水をかぶせられて、銀のナイフで動けないところを一突きにして、

さらし首にされたって話も聞いた」

思わず息を呑んだ。その話を思い出して話している彼女が、辛そうな顔をしているのか、怒りに震えた表情なのか、横顔だけでは、僕にはつかめない。でも、この場を動けない。リタの顔を見に行けない。

「でも私は、そのことを知らないの。全部聞いた話で、首都を追われた時しか人間に襲われたことはないの。それに私たちも、人間に少しちょっかい出してたところはあったしね。だから、若いほど人間への怒りは薄いし、長生きしてるほど、強い嫌悪感を抱いてる。この小屋にいるのはみんな若い吸血鬼だよ」

そして、この小屋にいるのは彼女の仲間の中では少数派のはずだ。だからリタは、僕に「無暗に詮索しないこと」と念を押してくれたのだろう。その彼女がこちらを向いた。

「でも、いくら嫌いでも、殺したいほど憎くても、人間はいなくなってくれない。人間とは離れられないの。人間の数の方が多いし、私たちは人間にはかなわない。だから、私たちにとって害のない人間とはきちんと付き合っていないと……なるべく好きになっていかないと、私たちは生き残れないから。争わなくてもいいなら、争わない方がいいと思うから」

聞き終わった僕には、そこに返す何一つの言葉も思いつきすらしなかった。彼女の決意はとても悲壮なものにしか思えなくて、それを簡単に肯定も、だからと言って否定することもできないから。それに僕が何を言ったって、ただの安っぽい言葉にしかならないと思えてしまったから。それでも彼女は、がんじがらめになっていた僕が次に何かを言うのをただ待っていた。

どれだけの時間がたったろうか、ようやく僕が出した言葉は言葉にすらならないもので、リタは何を言ってるのと吹きだした。そしてようやく僕の体に、抜けていた力が戻って来た。

「だから私はここにいるの。周りからは反対されたけど、私が最初に人間に触れなきゃさ、誰も私の考えについてきてくれないわ。だから口ウ君と色々な話をしようと思ったの」

「……最初会った時、僕は怖かった？」

「襲われてもこれなら勝てると思った」

思わず僕も吹きだした。つられて彼女も笑う。さっきまでと全く違う、明るい声と空気が部屋を満たす。

「何か、ちゃんとしたリーダーみたいだ」

「失礼な。……まあ、私が立候補したわけでも、頼まれたわけでもないんだけどさ」

頭の中に大きな疑問符が頭の中に即座に浮かぶ。これも以前から気になっていたことだ。今なら聞ける。僕はその続きを頼んだ。

「集団の長は、ご先祖様の血縁で決まるの。私が一番ご先祖様の血が濃いから私がリーダー。リタって名前、リリースって祖先様から取ったんだって。……まあとにかく、なりたいたか、適性とか、そういうのは関係ないの」

「なりたくなかった？」

「みんな年上なのにその上に立つって、結構気を遣うから大変。自由に動けないもの。この部屋で暮らすのもすごく反対されたわ。自分たちの大切なリーダーが、あの残虐な人間に何をされるかって」

「でも怖くはなかったんだよね」

「虫も殺せないように見えたよ」

それはないだろう、と不満の意思表示が表情に思わず現れた。それを見た彼女はそれがおかしいように口元を押さえる。

「人間みな悪魔って思ってる吸血鬼が殆どだから。気にしないで。私自らが直々に見張っておくって言って、納得させた」

そう言うと彼女はまた笑う。過保護な仲間に対する呆れ口調こそ混じっていたけれど、いつも通りのリタに思えた。数日前にささいなことでもむくれていたリタが、ちゃんと目の前にいる。そのことに、なぜか僕は強い安堵感を覚えていた。僕は椅子から腰を上げて、彼女と共に窓の外を見た。真下には暗闇が、その少し向こうには松明の光と照らされた数人の赤鎧。そして彼らの向こうには風に静かに揺らされる森と、音もなく流れる川、仲間たちがいる洞窟の、閉ざされた入口。空にはきれいな月と星。それぞれの種族の宿敵は、すぐ隣にいる。けれども、僕らは隣に立てるし、静かに外を見つめられる。

「解決した？」

ふとリタが僕に尋ねた。もちろん、と首を振って、その声の方を向く。染みついた血のおいが少しだけした。

「やっと安心したって顔してたから」

「顔に出てる？」

「すぐに表情に出るから。保証する」

「なるほど。……悪い癖だね」

苦笑が漏れるのが自分でも分かる。きっと向こうにもこのぼつの悪さみたいなものが伝わっているはずだ。つられて向こうも微笑を返してくる。やっぱりばれてる。

「でもさ」

切り出した彼女は、窓から離れて、部屋の真ん中へと戻っていく。たたと軽やかに床を踏む。出来合いのぼろきれで作ったカーテンと、リタの長い髪が僕の隣で揺れた。

「だから、ロウ君を信用できたんだよ。この人は敵じゃない、ってすぐに分かった」

そう言ってリタは僕に向けて笑う。月の光が助けてくれて、僕はようやく彼女の顔をしっかりと捉えられた。思わず少しどきりとして、必死に表情を隠そうとする。ばれたかどうかは、分からない。

その後も僕たちはとりとめのない話をたくさんした。彼女の仲間たちの話をたくさん聞いた。僕も、自分が知っている話をたくさんした。太陽にあたるのがどういう気持ちなのか。実はこうもりを使役できること。だから遠くにいても、手紙を出せること。人間は血を飲めないのか。どうすれば人間でもおいしく飲めるか。さっきまでとは違ういつもの雰囲気の中で、何時間話したかも分からないまま、僕たちは知っていることを話し続けた。きっと日付なんて、簡単にまたいだ。眠気も忘れた。時々自分の表情を隠しながら、終わることなんてないような会話をした。

**60/12/21

この日、ついに川の近くから赤鎧の姿が消えた。彼女たちは警戒に警戒を重ねながら、約一週間ぶりに外の世界に足を踏み出した。人間たちに奪われていた、吸血鬼の世界が帰って来た。世間では生誕祭が近くなって、川下の街や首都には多くの人が集まるから、そっちに兵士を回したのだろう。

ともあれ長い長い我慢から解放されて血気盛んな吸血鬼たちは、鬱憤(うつぶん)を晴らすかのように川に土や木を投げ入れるのかと思っていた。僕も今日こそはリタの大木持ち上げを拝めるかと思って窓際で待っていたけれど、一方でその方法で本当にできるのか、とも考えていた。もしその日中に川をせき止めて、かつ全員が渡りきれなくては、また赤鎧たちがやってきて、大木は取り除かれてしまう。それだけではなく、昨日までのようにまた夜出歩けなくなってしまおうし、いよいよこの周辺が疑われる。それでもほかに思いつく手がない僕は、もし彼女たちが木を入れ始めたなら止めるべきか否かを迷いだしていた。

じっと見ていると、彼女たち吸血鬼一行の殆どがいつもの土木道具を何も持たずに、一層濃い闇の支配する森に入っていく。その動向が気になって窓から覗こうとしても、森の闇は深すぎて全く見えない。誰かが出てこないかとじっと目を凝らし続ける。しかしどれだけ待っても誰も帰って来なくて、ついには僕が先に根を上げて、近くの椅子にもたれかかった。

これだけ長い時間帰ってこないということはたぶん、食糧を取りに行ったのだろう。僕はそう結論を出して、すると少し肩の力が抜ける。昨日までのように、長い間出てこれなくなった時のために、新たな貯蔵が必要なはずだから。彼女に以前聞いたが、首都の地下で暮らしていた経験から、最低三日分は生きられるように飲料血をストックしておくらしい。ずっと外に出れずに狩りができなかったから、もうぎりぎりだったはずだ。しばらくは彼女たちが帰って来る度に、この小屋にも猪や熊の死体と血が運び込まれるだろう。

血のおいも獣の死臭にも慣れてしまった僕の人間としての正しい感覚は、既に狂い始めているのかもしれない。でも、それでもいいとすぐに思えた。そのにおいを通じて、彼女たち吸血鬼がさらに分かるような気がしたから。

しかしあの日のように突然赤鎧が尋ねてくるかもしれない、そう思うと危機感がまた湧いてきた。獣の死臭と血のにおい、それもごく最近つけられたような新しいにおいがする玄関なんて、絶対に怪しまれてしまう。彼らに小屋の中に入られてしまったら、隠し通せるかは分からない。

仮眠をとった後、いつものように彼女たちを出迎えるために起きた。玄関を確認してから階段脇で待っていると、新たな非常食と共に彼女たちが入ってくる。体格のいい男吸血鬼から、僕の腰より少し背の高い程度の子吸血鬼までが、みんな同じように肩から熊や猪やらを担いでいた。これなら大木だって担いでもおかしくない。感嘆が顔に出ていたのか、子供の吸血鬼からは不思議そうな目で見られた。

そして一団を全員通した後、戸棚の奥から街で買いためしていた豆型の消臭剤を取り出して、彼らが通った後に撒(ま)いた。彼女たちが初めてこの小屋に来てすぐ、まだ血とかのにおいに慣れていなかった頃に、街の市場で買い占めたものだ。使う機会はないかもなんて思っていたけど、さすがに今回はたくさん使わないといけないうら。

彼らが歩いた跡にからんからんと音を立てながら床にばらまいていると、廊下の先が突然ざわめきだした。使っていた頃にはその存在に気づかなかったのか、豆型消臭剤を初めて見る吸血鬼もいたようで、一部がびっくりしたのか震えだした。その奥から男吸血鬼がそれをかばうように、こっちに向けて少し牙をむいて威嚇しているような気がした。

僕は少し慌てながらも、これはにおいを消すためのものであって、君たちを消すためのものではないこと、人間よけのためににおいを消すことを必死に訴えた。彼らは僕をじっと見つめながらも、襲い掛かってくるようなことはなく、廊下の奥へと消えていった。

言い分を分かってくれたのか、行く手にばら撒かれた消臭剤を警戒してかは分からない。人間が得体の知れない豆を撒いているのだから、警戒する吸血鬼がいるのも当然だろう。そうしなければ生きられない生を過ごしてきたはずだから。

ただそれでも、僕の手元に残ったのは、撒き残したわずかな豆、そして彼らに睨まれたあの時に生じた、わずかな心の揺れだった。

——この気持ちはなんだろう。

感情がこんがらがって、ぼんやりとした頭で居間に帰った。椅子に座って、水を飲んで、僕は考えた。時間を忘れて、その揺れの正体を暴こうとした。いつしかぼろ布カーテンが光を帯びた。遠くでにわとりが鳴いて、西の空にくすんだ雲を見た。それでも、僕にはその答えが分からなかった。そしてこの日、彼女と何も話さなかったことさえも、その時僕は気づかなかった。彼女がここに来てから言葉を交わさなかった日は、一日たりともなかったのに。

**60/12/22

きれいな満月が見えるはずだった今日の夜は、月に代わって分厚い雲が支配する空模様だった。風も強くて、空気が湿っている。いつ雨が降るかとか気が気でない吸血鬼たちはみな、住処の周りをうろうろするのみ。小屋から出て行かない吸血鬼たちもいるし、出て行った吸血鬼たちも散発的に小屋に撤退してくる。

ここに残っている彼女の仲間たちは、階段脇の僕を見るなり目を逸らし、踵(きびす)を返して地下の居城へ帰っていく。触らないように、慎重に避ける少女。肩がぶつかって、こちらを一瞥する青年。顔を覗き込むようにして、その後走って去っていった少年。次々と僕の前を通過する。そんな彼らにおかえりという言葉はどうにか絞り出しても、無言しか帰ってこなかった。その度に何度も心が揺さぶられて、昨日と同じ感情が蘇(よみがえ)ってくる。僕の体中に溶け込んで、どこからも抜けていかずにぐるぐると回る。

それが堪えて、僕は音も立てずに二階に撤退した。冷たい水をひと思いに流し込んで、強くまぶたを閉じて、それでどうにか忘れようとする。一人の部屋には、周りの音がよく響く。下の階からのわずかなざわめきが聞こえる。いつもは聞こえないはずのその音が、今日は鮮明に聞こえてくる感じがした。

真横から、ばちばちという音がした。

明らかに異質な音に、目が覚めたように僕の体は動いて、反射的に近くの窓を開ける。その向こうで降っていたのは、小粒ほどの雹(ひょう)だった。雨でもなく。雪でもなく、いつもは降らないものが空から落ちていた。彼らが住んでいる洞窟が窓から見えて、いくつかの影がばたばたとそこに入って行くのも見えた。

僕はその光景にしばし目を奪われていた。そして、やがてその影も、ざわめきも消えた。誰も小屋には入ってきていない。玄関の扉を叩くような音もない。だんだんと雹は雨交じりになっていた。雨と雹と風だけの合奏が夜の世界に響く。自然と息が漏れて、自分でも分かるくらいに安堵して、

——リタはどこ？

気づいた瞬間、僕は小屋の出口に向かって走っていた。夜の世界に向かって走った。この小屋のどこにだって、リタはいなかったじゃないか。じゃあどこに？ 知らないうちに帰ってきた？ それとも、もしかして、あの叩きつける雨と雹の中に、今も取り残されているのか？ 疑心暗鬼を抱えながら、決して長くはない廊下を全力で走って、飛び降りる勢いで階段を駆け下りる。

そしてそこに、彼女はいた。視線が釘付けになった僕は止まれずに、勢いのまま壁に体をどんと打ち付けた。彼女は目を白黒させて、口をぼかんと開けたまま、激突して倒れこんだ僕を見つめていた。周りに他の吸血鬼も集まってきたが、みんな彼女と同じような顔をしていた。

我に返った僕に、彼女が無事だったことへの安心感と、今の姿への恥ずかしさが入り混じって襲い掛かる。体全体が熱を帯びていた。きっと相当に変な顔になっていただろう。僕がその感情を認識した頃には、リタはもう大笑いしていて、僕の中を暴れていた感情がみんな脱力感に変わってしまう。

そうしている間にも、騒ぎを聞きつけてか彼女の仲間が僕らの周りに増えていた。困むように見物していた。

周りを見渡す僕の視界に誰かの手のひらが入り込む。笑顔の彼女が伸ばした右手。僕がそれを無意識に手に取ると、途端周りがざわついた。何かを吟味するかのように、じっと見つめる女性がいた。辺りをきょろきょろする少女が、信じられないという表情で目をそむけた少年がいた。彼らの複雑な思いがぶつけられているような気がした。僕はそのまま立ち上がってもいいのだろうか、そう迷いが生じた次の瞬間、彼女の腕力だけで引っ張り上げられる。僕は動けなかった。

「大丈夫？」

視線の高さが一緒になって、距離がなくなるくらいに近づく。きょとんとした顔から発せられた問いに、僕は首を小さく縦に振る。リタの長い髪は、黒い上着に包まれたその肩は、少しだけ濡れていた。

「リタこそ、大丈夫なの、濡れちゃってるけど」

「大丈夫。心配しないで、平気だから」

そう聞いた僕からまた力が抜けそうになる。少し足がおぼつかなくなって、するとリタはまた笑いながら僕の右腕を引き上げた。

「助けに来てくれたの？」

「それでこれだから世話ないよね」

助けに行こうとしておいてこの様で、それで助けに来たとは言えなかった。代わりに出たのは精一杯の自虐。それを聞いたリタは、見透かしたようにまた笑う。僕は何も言わずに、さっき衝突した壁にもたれかかった。自分の上着を持った小さな女の子が、彼女の下に走って来る。そんな彼女は僕らを囲んだ仲間に、私は大丈夫と伝えて回っている。それを聞いて安心した彼らが奥に帰って、周りがだんだんと閑散としていく。

そして玄関に二人だけが残った。リタが行こうかと言って、僕はそれに呼応する。僕がさっき駆け下りた階段を上がって、居間の扉を開けた。窓の方まで歩いて、いつものように椅子に座って、彼女と対面する。それでも今だけは、何か特別な感じがした。

僕らは、いつものように話をした。全員の帰還を確認することがいかに難しかったか。雹を見たのが初めてであること。人間は雨や雪や雹を見るのが好きなのか。川の向こうにある世界でも、雹は降るのか。窓の向こうの雹の雨はいつしか、月光に照らされながら舞う雪に変わっていた。

**60/12/23

彼女たちが眠った後も雪は降り続けて、一日たったら積もっていた。窓の向こうは銀世界、川下の街は生誕祭でさらに活気溢れているだろう。でも積もりに積もった雪の処理を、一人でやらなければいけない僕のような人間からすると、雪はあまりうれしいものじゃない。起きて早々に目を輝かせたリタの横で僕はそっとため息をついていた。どうせなら屋根の雪を降ろしてもらいたいが、頼んで彼女たちの本来の目的を邪魔するわけにもいかない。

それに雪は雨と似たようなもので、いつ雨になるかは分からないから、今日も彼女たちの動きはばらばら。そんな吸血鬼たちに雪下ろしなんて頼めるはずもなく、また一つため息をついた。

結局洞窟に住まう吸血鬼たちは軒並み森の方に出て行ったが、ほかの仲間たちは出てもすぐに帰ってきた。昨日と違っていたのは、帰ってきた彼らが地下室や自分たちの部屋ではなく、居間に集合し始めたことだった。

ぞろぞろと入ってきた彼らが意外で目をむいてしまったが、彼らは気にすることなく部屋の隅に固まり始めた。身構えながらもどうしたのかと聞いてみると、かなり時間がたってから地下が寒いからと返事がきた。実際に上着を被って、おしくらまんじゅうのように固まっている。暖炉が使えない吸血鬼たちは、集まって暖をとるしかないのだろう。

もの珍しさに彼らの塊を見ていると逆に、見るんじゃないとでも言いたげな赤色の視線がいくつも僕を貫き、僕は慌てて目を逸らす。その態度がきよどきよどとし過ぎていたのか、居間に帰ってきたばかりのリタに指を差して笑われた。塊はそんな僕らを、視線を逸らさず、ただ見つめている。好奇の目線に、冷めた目線もある。僕を観察しに来た……というのは、もしかして考えすぎだろうか。

邪推しながら目線の一つずつの反応を見つめていると、彼女が僕の服を引っ張る。こっちに来てとのご要望。さすがにもう笑いは収まっていたようだ。

僕たちは二人で居間を出た。階段に向かって歩きながら、今から外に行ってくると、リタは言った。

「いつごろ帰って来る？」

「分かんない。森の方見に行ってくる」

「分かった。じゃあ帰って来るまで待ってる」

「大丈夫だよ。無理しなくてもみんなもいるから」

たわいのない会話を交わす。玄関に着く。昨日僕がぶつかったところを見て、リタが含み笑いを浮かべている。抑えきれない笑い声が聞こえる。お願いだから忘れてと頼んでも、知らな一い、と取りつく島もない。顔から火が出そうになるのを、僕は必死に抑えようとする。それに四苦八苦している間に、彼女がもうドアを開けていて、襲い掛かる冷気が僕らの体を突き刺した。二人揃って震える。すぐに息が白くなる。いってらっしゃいの意をこめて右手を小さく振ると、リタは反対に僕に、急に近づく。目の前まで。僕は思いがけず面食らう。彼女が言葉を発する。風にかき消されそうな言葉が僕の耳に届く。反応を返そうとする。けれど、彼女はすぐに踵を返して、ドアの向こうに消えていた。

僕は立ち尽くす。止まらない心臓の音、収まらない動揺。それに隠され奥深くにうごめくぐちゃぐちゃな感情。僕の中の全てを整理できないまま居間に帰る。部屋の隅から発射される、いくつもの赤色の目線に迎えられた。僕は無意識に窓を開け、リタが行くと言っていた森の方を覗き込む。

突然冷気に襲われた吸血鬼たちがざわついた。それでも僕は意に介さなかった。風にあたってようやく動揺も動悸も収まった僕の頭の中では、リタが別れ際に言った言葉が渦巻いていた。

——夜の間は、出歩いちゃだめだよ？

なぜ今になって、またその言葉なのか。

リタとはすごく仲良くなったし、小屋の吸血鬼たちとも一緒に暮らせている。少なくとも、脅威とまでは見られていない。もしそうなら、僕は今すぐにでも殺されているはずなんだから。けれど、洞窟に住んでいる、そして今森にいる吸血鬼たちは、僕のことを、人間のことを、憎悪、あるいは脅威の対象として見ている。だからそれに改めて釘を刺した。

心配してくれている？ だとしたら素直にうれしい。

でも、本当はそれだけじゃない。あの時、一瞬よぎった薄暗い感情は、きっと不安だ。何かがある気がするんだ。

僕はリタのことを知っている。ずっと過ごしてきた仲間たちほどではなくたって、知っていることがある。君も僕と同じで、表情に出やすいこと。あの時君は笑ってた。けれど、何かを隠すように笑っていたんだ。

今日一番の、強くて冷たい風が吹いた。部屋の隅の塊から小さな女の子が出てきて、不満ありげな目を向けながら、無言で窓をびしゃりと閉めた。そのことを気にもせず、僕は窓の外を眺め続けた。吸血鬼のように夜目が効くわけではないから、暗闇しか見えないというのに。やがて後ろが騒がしくなり、一人二人と居間から消えた。その彼らのような影が、窓の真下に見えた。部屋から出て行った仲間たちは、彼女を探しに行った。空はもう明るくなり始めているのに。

それでも、僕は外に出ることができなかった。行かなければいけないと、頭の中では分かっているのに。動け動けと念じていても、ただ時間が過ぎるだけ。

川下の方から、鐘の音が響いた。それに合わせてにわとりが驚いたように一斉に鳴く声が出た。

それでようやく決心がついて、この前のように廊下を駆けた。同じ場所にぶつかるくらいの勢いで、階段を駆け下りる。

玄関扉の向こう側から、聞いたことのないようなざわめきが僕の意識に突き刺さった。

その正体が誰だか分からない、もしも洞窟の吸血鬼だったら、街の赤鎧たちだったらという可能性が、ほんの一瞬頭をよぎる。もし彼女たちなら、向こうから扉は開くのに、僕はすぐに自分から、扉を開いた。

雪崩(なだれ)のように小屋に入ってきたのは、さっき小屋を出て行った吸血鬼たち。その数人がかすかな日光を浴びたために倒れこんできた。そしてその中心に、彼女はいた。両肩を支えられた彼女は、全身が汚れて傷ついていて、全身黒い服はところどころ裂けて、そこから病的なほど白い肌と、生々しい切り傷が見えていた。状況を追い切れない僕の横を、吸血鬼たちは僕には無言で通り過ぎる。担がれる格好だった彼女が僕の横を通り過ぎて、心配しないでと言いたげに小さく笑いかけてくる。僕には何も分からなかった。何かが起こっているということしか。

「街が吸血鬼に襲われた」

夜が明けるとすぐに、川を上って赤鎧たちがやってきた。

街にある二つの門が攻められた。夜の警備の兵士たちは応戦するも、闇に紛れた奇襲にどうすることもできずに、混乱の間に次々と倒れ、その血を吸われた。朝が近かったことが幸いして、固く閉じられた門こそかなり損傷したもの、街の住民は守りきった。そのように聞かされた。

以前の件で疑われているかもしれないと身構えていたが、ただ状況を教えてくれただけで、聞き込まれたりしなかった。街がそれどころではないのだろう。当たり前だ、話を聞く限り、もう一度攻められたら正門は突破され、住民も餌食(えじき)になるだろうから。それでも彼らの目線には、人間を守ろうとする決意よりも、襲ったであろう者への侮蔑(ぶべつ)がより強く感じられた。後ろに控えた赤鎧たちの吐き捨てるような声が、確かに聞こえていたから。あの化け物どもめ、と。

今何が起きているのか、知りたかったことについて、僕はすぐに理解した。洞窟にいる彼らが、人間を殺しに行った。そしてきっと、リタはそれを止めようとした。止められなかったが、遅らせることができた。そうして、人間たちは最後の一線は越えさせなかった。

洞窟の方には足跡が残っていない。きっと彼らは帰ってきていないのだ。逃げ遅れて、照りつく日光にやられてしまったのか、あるいはどこかに逃げ延びたのかは分からない。

リタはこうなることを分かっていたんだ。

——だからわざわざ外に出るなと僕に言ったんだ。

気づいた僕は、彼女に会いたいという衝動に急速に支配された。傷の様子はどうなのか。本当に洞窟の彼らが、人間を襲いに行ったのか。何が原因なのか。明日も戦いが起こるのか。

なぜ僕に、そんな言葉をかけたのか。

聞きたいことはたくさんある。心配。不安。驚き。様々な思いが体中を跳ね回り、自分ではどうすることもできないくらいに、僕の鼓動を早くする。

彼女の部屋の前には、小屋中の吸血鬼が集まっていた。僕はそこに割り込もうとしたけれど、彼らに腕をつかまれ止められた。彼らは何も言わなかった。誰もがその表情で、隠しきれない不安を訴えていた。初めて見る表情をして

いた。一緒に逃げてきた仲間が、自分たちと全く違う方向へ歩いていることを知ってしまった。自分たちがどうなるのかが分からなくなっているんだ。

——止めなきゃ。

僕は人間だから、彼らの不安な顔を見たから、でもない。吸血鬼によって人間が襲われた「今」は、間違いなく、リタが望んだ世界じゃないから。争わなくてもいいなら、争わない方がいい。リタは僕に、そう言っていたから。

でもどうしたらいい？

僕は人間だ。彼らを力で止めることはできない。

僕は人間だ。僕の言葉は、彼らには届かない。

何より、リーダーである彼女にすら、止められていない。

思わず拳を握りしめる。腕に力が入る。つかまれていた腕は、それでもびくとも動かない。誰かが僕に向かってさやいた。

「これは俺たちの問題だ」

——僕には、何もできないのだろうか？

何を考えても、結局僕にはできないで結論が出てしまう。気づくと腕を握っていた吸血鬼はいなくなっていた。僕は無言でその場を後にして、誰もいない居間に帰る。空は薄暗い雲が張っていた。きっと今日は雨が降る。僕にはただ、その雨が長く、長く続くことを祈ることしかできない。

**60/12/24

僕の願いが届いたのか、昼には雨が降り始めて、夜になった今でもその勢いは衰えない。吸血鬼たちは外の世界に出れなくなった。そんな空模様と対照的に、廊下の窓から見える街は、いつになく明るく輝いた姿を晒していた。松明の光が家じゅうからこぼれていて、夜なのに、昼のように光を発する。温かい明かりのほずなのに、そうは思えなかった。その光は、近づくものを焼き尽くすためにあるから。

街を襲ったであろう彼らの姿も見当たらない。小屋の吸血鬼たちは交代しながら、洞窟の方向を見張っていた。帰って来るはずがないことは分かっているだろうけれど、それだけ仲間の行先が気になるのだろう。僕は彼らの姿を見ながら、居間に帰る。途中で女の子が隣を通り過ぎた。見向きもしない。蔑視、警戒、観察、あるいは何かしらの視線を、これまでは僕に向けてきたのに。

僕は何もできていない。街に行ってみても、誰からも詳しいことが聞けない。街中には、誰もいないから。雨音以外の音が響かないその街は、生きた廃墟と言うべき世界だった。

赤鎧以外の姿はその廃墟にはいなくて、彼らもこれは軍人の仕事だと緊張気味の顔で言うだけで、僕が知ってる以上のことは教えてくれない。いや、彼らも何も分かっていないのかもしれない。だから今みたいに、僕も彼らと同じように、居間からただ何も見えない外の世界を見つめるしかなかった。

——このまま人間と彼女たちは、いつかまた戦うようになるのだろうか？

それをリタは望んでいなくて、でもほかの吸血鬼たちはそれを望んでいた。人間は、自身を守るためにそれに応じるだろう。どちらかが倒れるまで。だから人間と吸血鬼は、どんな関係にいらればいいのだろうかって、いつかそんなことを考えた気がする。その時の結論は？ そうだ、出なかったんだ。あの疑問が帰って来たんだ。

自分に向けて、問いかけをする。解決法はなに？ 終わりのない自己問答が始まる。窓に雨が叩きつけて、いくつもの筋になって流れる。なのに僕の頭の中には、いい方法は降って来ない。

「降ってるね」

窓に誰かの影が映った。後ろを振り向かなくても分かる。何度も聞いた声があるから。

「今日はもう、外に出れそうにないね」

ようやく僕は後ろを振り向く。彼女がそこに立っていた。いつもより穏やかな声に、赤く光る、優しいまなざし。僕の隣まで彼女が寄ってきて、体に残った生傷が僕の視界に現れた。

「でも雨が止んだら、ここを出て行くことにした。今はいない仲間を探して、向こう側を目指すんだ」

窓枠に手をつけて、外の世界を見つめた彼女は、決心するように僕に話す。顔も、目線もぶれないリタに対して、僕の表情と心はすぐに揺れ動いて、とっさに少し顔を逸らした。

「もう人間たちが私たちのことを探してる。いずれ見つかったら、ここから違うところに行くの。もっともっと遠くに」

でも、それはどこ？ その問いは声には出てこない。

「山を登る。すごくゆっくりとしか進めないと思うし、怪我しちゃうかもしれないけど、もうここには入れないからさ」

北側には山脈がそびえ立っている。そこを越えれば、国境を越えられる。ここから別の国に行ける。でも、川を埋める方を選んで、そっちに行かなかったのは、そっちの方が難しいからじゃなかったっけ？ 日光を防げないって言っていた記憶が、僕の脳裏から引っ張り出される。

リタは僕の隣を離れて、椅子の背にもたれかかって、足を投げ出すように座った。山がある方角を向いて、決意を固めようという声で、きっとそういう表情もしていて、なのに僕には彼女の声が、悲壮を隠しているようにしか思えなかった。

そこまで分かっているのに、そんな彼女に、僕は何も言うことができなかった。真意を聞きたいという思いも、別れを惜しむ言葉も、彼女たちへの励ましも、何も。ただ時間だけが過ぎていって、ばちばちと雨脚が強くなっていくのを見ているだけ。その間にも、僕の中ではリタにぶつきたい感情が暴れまわっていて、整理することができずにいた。

——どうして君たちが、とぼっちりを受けるように出て行かないといけないんだ？

川岸を、松明を持った鎧の男たちが歩いていた。

——悪いのは洞窟にいた彼らであって、彼らに憎悪を与えた人間たちの誰かじゃないか。

窓に雨の筋が何本も流れる。リタはずっと、向こうの方を眺めてる。

——せめて、ほとぼりが冷めるまで

「ここに居たっていいのに」

溜まっていた激情が、少しだけこぼれだした。気づいた僕はすぐに口をつぐむ。放っておいたら、無秩序に流れ出してしまいそうだったから。

「だめだよ」

そして、それを聞いたリタはようやく僕の方に顔を向ける。こんなに苦しい状況なのに、無理をするようにして彼女は笑っていた。

「時間がたつほど、私たちを探す人間が増えて、嫌いな感情がどんどん広がって行って、取り返しがつかないことになっちゃうって知ってる。前いたところを出る時と今、同じことが起こってるから」

いきさつは知らなかったけれど、少し前に首都から逃げてきたとは聞いている。同じことが起きたというのなら、その規模は分からないにしても、吸血鬼側が人間たちを襲ったのがきっかけになったのだろう。

なら彼女たちが悪いんじゃないか、と短絡的に考えることは、今の僕にはできなかった。彼女たちのことを知ってしまったから。人間と吸血鬼が、互いを嫌っていること。人間の持っている松明やお祈り用の十字架、その全てが彼女たちへの凶器となること。それまでも迫害を受けた過去があること。そして人間たちと同じように笑うことも、動揺することも、悲しい思いをすることも知ってしまった僕には、人間の誰ものような感情はもう抱けなかった。

「このままじゃまた争いになる。ここにいるみんなも、それにロウ君も巻き込んだら、行かなきゃ」

——僕のことなんてどうでもいいから

「僕のごときはなんて、言わせないよ」

はっとしてリタの顔を見る。二つの大きな赤い目が、僕のことを睨んでいた。でもそこに含まれた感情はきっと。彼らが人間に本来向ける視線ではなく、子供をたしなめるようなそれだった。

「ロウ君は私たちを認めてくれた。だから、それにはちゃんと応えたいんだよ。例えロウ君が、私たちとは違う、人間であっても……ロウ君には無事でいてもらわないといけないんだよ」

その言葉はひどくうれしいもののはずだったのに、僕はすぐにリタから目を逸らしていた。そのうれしさを読み取られたくないからじゃない。その言葉を受け止めて、認めてしまったら、リタたちはここから行ってしまおうと分かっていたから。

それでも、僕には彼女たちを止められない。ここにいてほしいという僕の思いは、ただのわがままだから。彼女が僕のことを思ってくれるなら、僕も彼女たちのことを思っただけでいいんじゃないんだ。

じゃあ、今僕ができることは？

「……ありがとう」

何の心配もなく、送り出してあげることだけだ。そう決心して絞り出した僕の声は、ほんの少しかすれてた。

「お礼を言わなきゃいけないのはこっちだよ。ここにいさせてくれて、楽しかった」

リタはいつものように、静かに笑ってた。だから僕も笑顔を返そうとしたのに、うまく表情が作れない。よほど変な顔になっていたのか、いつかのようにリタは吹きだした。今生(こんじょう)の別れのような顔をするなど笑う。そんなひどい顔になっていたことを、今の僕は否定できなかった。

「大丈夫だよ。生きてれば会えるから。そのためにここから出てくんだもん」

だからまた会いましょう、と彼女は少ししてから付け加えた。僕はその言葉だけには、何よりも強く頷いた。「生きてれば」ということが、彼女たちにとっていかに難しいかは分かっている。それでも、僕はその言葉を信じたかったし、すがりたかった。そう思わなければ、僕には耐えきれそうになかったから。

だから僕は、また窓の方に向き直っていた。リタの顔を見ると、今にもまた、行くなと言ってしまいそうになる。雨はまだ降っている。でも、さっきより少し勢いがなくなっていた。きっと明日には止んでいる。彼女たちが動ける夜が来る。そしたら。

結局抑えられないなあ息を吐くと、背中に少しの重みと温かみがやってきた。思わず振り向くと、そこに僕にもたれかかるようにしたリタの顔があって、僕はぱっと目を逸らす。

するとリタは一旦離れると、次には僕の胸あたりを両手でもって、ぐっと持ち上げた。僕の両足は宙に浮き、思わぬことに声も出せず、口をぱくぱくさせながら、ばたばたと足を振るわす。そんな抵抗など意に介さず、僕をいつも座っている椅子まで持っていった。今まで考えていたことがみんな吹っ飛んで、僕はただ目を白黒させるだけ。それを見てまたリタが吹き出すから、何をするんだ、とようやく抗議の声が出た。

「そうだよ。そうでなくちゃ」

彼女は満足げな声を出して胸を張る。僕は何がなんだかという気持ちを、わざと表情にのせようとした。

「ロウ君は最後にそんな悲しい顔をしてた、なんて覚えておきたくはないの。永遠にお別れじゃないって、さっき言ったばかりじゃない」

そう言うとリタはその場でくるりと回る。照れ隠しのつもりなのだろう。そう思うと、のどの奥から笑いがこみ上げた。それを見た彼女もつられて笑い、僕の横に椅子を引いてきて、そこに座る。やっと彼女の顔を見られたように思えた。

「ねえ」

「なに」

彼女の問いに、すぐに答えを返せる。体が自分に戻ってきたような、そんな気分だ。それだけで、僕は少しだけ満たされた。

「夜が明けるまで、お話ししようよ。私たち吸血鬼を受け入れてくれた人のことを、もっとたくさん知りたいから」

僕はそれにただ頷いて、少しずつ、話を始めた。有限な時間に焦らないように、ゆっくりと話をした。時折リタの人生も聞いた。自分が出した言葉を、彼女の物語を、そして彼女と過ごした今を、自分の中に刻み付けるかのように、僕たちは長い会話をした。

そしていつしか窓の外が、少しずつ明るくなった。僕たちは部屋を移して会話を続けた。話すことがなくなったら、今までの思い出話をした。それでも、未来のことは一切話さなかった。それに触れたら、この時間が終わってしまうようにと思ったから。

全てを吐き出し終えて僕たちは別れた。最後には顔を合わせて笑った。リタの表情は暗くてよく見えなかったけど、きっとそうだと確信した。それだけが僕の精一杯で、居間に帰った僕は、糸の切れた人形のように、静かに眠った。

**60/12/25

夜になって、ようやく僕は目を覚ました。机に突っ伏して寝てしまっていたはずなのに、体が妙に暖かい。少し違和感を覚えて体をゆすると僕の肩から、彼女が外でずっと羽織っていた黒い上着がばさ、と床に落ちた。袖や裾が少しずつ擦(す)り切れて、小さく裂けている。それを見て確信した。部屋の中も、玄関も、外も、確認する必要なんてない。

もう、彼女たちは行ったんだ。

洞窟にいた彼らとは合流できて、これからも一緒に歩めるのだろうか。この場所から、彼女たちは無事出られるのだろうか。分からないことだらけだったけれど、僕には彼女を信じることしかできない。だから、そうするだけにした。

窓の外では、昨日までの雨の代わりに、柔らかそうな雪が降り始めていた。明日には積もるだろうと外を見る。外にはもう誰もいない。僕はまた、一人に戻った。

**60/12/26

一晩降り続けた雪は少しばかり積もっていた。歩くと足跡がかすかに残る。まだ降り続けているから、明日には屋根の雪を下ろさないといけない。そんなことを考えながら、さくさくと雪を踏みしめ川下の街まで歩いた。

この前行った時には誰一人としていなかった住人たちが、ほんの少しだけ街にいた。それでもその殆どは赤鎧の兵士たち。それに、住人兵士に関わらず、胸元には銀色の十字架を首飾りにして下げていた。その光景を眺めていると、後ろから赤鎧のおじさんが飛んできて、持っていないのかとか、だめじゃないかとか言いながら、有無を言わず十字架を僕の手のひらにねじ込んだ。その時、僕は痛いほどに理解させられた。吸血鬼のことを怖がっていないのは、嫌っていないのはおかしいことなんだ、と。

そのおじさんは僕がよっぽどばかで、状況を理解していないと思ったのだろう。吸血鬼たちが人間を襲ったこと、この街は壊滅寸前に陥ったこと、その他いかに吸血鬼が恐ろしい存在で、打倒しなければならぬかを熱弁された。でもようやく解放された僕の耳には、おじさんの発した言葉は殆ど残っていない。彼らは、それだけの存在じゃないと知っていたから。

だから僕の記憶の中に残っていたのは、明日には首都からの増援がここに着くから安心しろという言葉と、言外にある犯人たちはまだ見つからないということ。そして僕と話してる途中におじさんの手は、恐怖が怒りかでわなわなと震えていたこと。

赤鎧の兵士たちに見送られるように門を出て、僕は帰りの道を歩き始めた。だんだんと雪が多くなって行って、冷たい風が容赦なく吹き付ける。その寒さに思わずポケットに手を入れると、さっき持たされた十字架が指にかかかって、それを無意識にポケットの奥深くに押し込んだ。

玄関について、ドアを開けて、僕はいつものように居間へと向かう。一通りの家事をこなすと、もう日が暮れる時間になっていた。夜が近づいてくる。吸血鬼の、彼女たちの時間が近づいてくる。

それでも、小屋は静かだ。一人暮らしには多すぎる部屋の扉が開く音も、廊下を続々と駆ける足音も、外からのざわめきも何も聞こえない。ごうごうと冷たい風の音だけが聞こえて、それが少しさびしかった。

**60/12/28

相変わらず風が強くて、煽られた窓がかたかたと震えている。その音に加えて、ざくざくと雪をかき分ける音が近づいてきた。何かかと思いつきながら外を見ると、雪のカーペットに無数の足跡をつけながら、いつかのように赤鎧が集団で川沿いを歩いていた。その横には何人か、白い鎧を着た兵もいる。腰には大きな銀色のサーベルと、見たことのない猟銃のようなものが差さっている。赤鎧の人たちより明らかに強そうな装備と厳格な表情。今まで街で見たことがなく、いったい誰だと思ったが、それが以前街で聞いた、首都から来た援軍だとすぐに合点がいった。

彼らは辺りで聞き込みして情報を辿っているのだろう、僕のところにも当然ながらやってきた。以前のように知らないと言えたらそれだけで済んでしまった。彼らもまさかここに数日前まで何十人もの吸血鬼がいたなんて思いもしないだろう。

早期解決のために、数日して準備ができたなら大規模に搜索するとのことらしい。曰く、我々は吸血鬼どもよりも夜は動けない、そしてやつらの方が、力が強い。だから先制攻撃のため動いたものを全て敵、つまり吸血鬼として動くとのこと。

人間を間違えて攻撃したくないという思いも確かに読み取れたし、きっとそれを川下の人間たちが望んでいることも分かる。それでもその作戦には、何か気味の悪さを感じて、彼らに向けていた視線が少し下がった。銀色に鈍く光るサーベルが視界に入る。鮮やかな赤色がかすかにこびりついていて、それが目の前にいる存在の持つ力を感じさせる。

——なんでサーベルに血が残ったままなんだ？

僕の視線に気が付いたのか、白鎧は少しかがんで、子供と話す時のように僕に視線を合わせる。大丈夫だ、と僕の頭を撫でた。その時僕の頭の中では、思いつきたくない予想が高速で組み立てられていた。目の前の白鎧が口を開く。僕に何かを言おうとする。

——途中で、吸血鬼たちと戦ったんだ。でも我々はやつらに勝てる。だから安心してここで待っていなさい。

彼らは僕を諭すように優しい口調でそれを言う。

聞きたくなかった言葉を僕に言う。

頭の中で反響する。

彼らの姿が見えなくなるまで、僕はその場を動けなくて、ようやく我に返った僕は、小屋の中に戻った。一度かけた鍵を、もう一度開けた。太陽が出ている今、帰って来るはずがないのに。

ふらふらと二階に戻って居間に入って、水を一気に飲み干して、それでも揺らぎが収まらない。ふらふらと居間を漂っていると、僕の視線は窓の向こうにそびえる山に自然と引きつけられた。

——白鎧たちが殺したのは、誰だ？

山に向かった彼女たちなのかもしれないし、もしくは街を襲った洞窟の彼らのことかもしれない。真相は分からない。そこにリタたちがいたかなんて、確かめようがないのだから。

山は頂点から中腹くらいまで、ここ最近の冷気のせいで真っ白になっている。当然ここからじゃ、何も見えない。もしまだ彼女たちが生きていても、きっと数日後には、赤と白鎧の彼らが山を登っていくだろう。十字架と、銀製の武器を持って、血眼になって、彼女たちを捜し歩く。そして彼らがやったように、そこにいる吸血鬼たちを打倒する。

——リタたちは今どこにいる？

考えないようにしていたのに、その尻尾が飛び出した。すぐに体がうずいてきた。どれだけ大丈夫だと自分に言い聞かせても、体も心も言うことを聞かなかった。彼女たちのことが頭を支配して、理屈は吹き飛ばす。じっくり考えるまでもなく、僕の足の向く先はもう決まっていた。

——このことを、伝えなきゃ！

そうなのは一分でも耐えることなんてできずに、鍵を開けて、外に飛び出した。ポケットの十字架は机の上に放り出して、リタが置いていったぼろぼろの上着を羽織って、吹雪に包まれた世界に降り立つ。足首が軽く埋まるくらいに積もった雪が歩きにくくて仕方がないのに、夢中になって歩を進める。真横を流れる川の端が薄く凍りついて、それが寒さを際立たせた。そのはずなのに、僕の体からはそれ以上の熱が生産されていた。

心配、気になる、守りたい、ただ会いたい、全ての思いが燃料になったかのように、僕の足は回転する。僕が行って何になる？ そんな自分自身への疑問すらも投げ捨てて、どこにいるかも分からないリタたちを見つけようとして、眼下の雪をかき分けながら足を運ぶ。

川沿いに坂道をただ上った。空がだんだん暗くなっていった。人間たちの世界が終わって、彼女たちの世界が始まる。視界がどんどん暗くなって行って、やがて真っ暗に近くなる。松明も何も持っていなかった僕からは視界がだんだん失われていった。だから目を諦めて、風音の中から探そうとして耳を澄ます。それが無謀な挑戦だと頭では分かっていたけど、それでもそれに可能性を託した。彼女たちがやっていた川埋めだって、同じくらい無謀だったじゃないか——とあの日々に思いを馳せながら。

きっとまだ遠くには行ってないはず。何故なら彼女たちは、日光を避けられる場所を探しながら移動しないとイケないから。まだ山に入ったばかりのこの辺りに、きっといる。

ついに暗闇しか見えなくなって、前にあった木にぶつかる。それで興奮から目が覚めたように体の芯が冷えて、脳が急速に冷却される。そしてようやく、どうしようもないなあと後悔が湧き上がり、それでも手探りに前進した。川沿いに来たはずなのに、一面に木の感触があった。後ろに戻り続ければ小屋に戻れるつもりで歩いていたのに、気がかぬ間に感覚がずれていたみたいだ。もう水の音は聞こえない。聞こえるのは森のざわめき……それと、別の何か。否応なしに、緊張が高まっていく。心臓が走る。そこにいるのはリタたちか、それとも、別の誰か？

すぐ横から、地鳴りのような音がした。

これは違う、と体中が警告を発して、ここから離れろと足を動かそうとする。でもその前に僕の体は吹き飛ばされて、遠くの地面に背中から叩きつけられた。体中が痛い。ずんずんという音が向こうから響いてくる。でも近づいてこない、何でだろう。分からないや。

目が覚めた時僕の目の前にあったものは、何だろうか。暗闇に紛れてしまってよく見えず、ここがどこかも分からない。雪が積もっていたためだろうか、体は痛むけれど、起き上がれないことはない程度だった。雪に感謝するほかにない。

顔だけ動かして、手がかりを探すかのように周りを見渡した。何も見えないけれど、人の足音がいくつも聞こえた。気になって起き上がろうとすると、頭をむんずとつかまれてまた地面に押し付けられた。まだ動くなと言うかのように。

一番近くで聞こえた足音、僕をつかんだ手の主がたつたと遠くに消えて行って、僕はそこに残された。周りに何人かいる。彼らの視線を感じる。きっと遠巻きに、僕を見ている。ふいに懐かしいような気持ちに襲われる。僕はこの雰囲気、そしてここに立ち込めたにおいを知っている。獣のように正確な嗅覚があるわけではないけれど、このにおいは分かる。

僕はずっとそこにいたから。

遠くで声が聞こえる。僕が毎日聞いていた、あの声が近づいて、その途端に全身から力が抜けて行って、顔を上げようとしても上げられない。それでも早く早く無理して体に力を戻す。思わず頬が緩む。暗闇で何も見えないことなんて分かっているのに、食いつくように起き上がる。

次の瞬間、頬への強烈な衝撃と共に、僕の顔は真横を向く。どうして来たの！ という怒声が周囲一帯に反響した。

頬がじんじんして痛くて、少し耳もき一んとしている。真っ暗な視界が、さらに見づらくなっていて、おかしいなと目をぬぐったら手のひらが湿っていた。やっと会えたことに、まだ生きててくれたことに、僕はただ安堵した。別れてからたった三日しかたっていないのに、何十年ぶりに会えたような。何もかもが懐かしい感じがして、僕は感情を抑えきれなかった。気づけば周りに何人も集まっていたのを感じたけれど、それをはばかりの余裕はなかった。

食料を狙って彼女たちが追い回していた熊と、方向感覚を失って森に入り込んできた僕が、不幸にもはちあって吹き飛ばされてしまったらしい。それを追いついた彼女の仲間が熊と一緒に回収したようだ。本来ならそこで僕も殺されて、その血が今日の食卓に並ぶはずだったのだけど、明らかに知っている顔だったので、処遇に困って連れ帰ったという。何にせよ運がよかったとしか思えない。

今いるのは、山を登ってすぐにあった横穴を広げたところらしい。日が出る前にどこかに入らないといけないから、いくつも拠点を作って少しずつ拠点ごと移動していく。昔リタとの話の中で聞いた。

そして僕はその仮拠点の中でこってりと叱られた。なぜ追いかけて来たのか、それも何も持たずに来たのか、生かそうと心配した私の気持ちを返せ。

その見たことのなかった怒気に面食らってしまったが、今思い返せば、小屋を出てきた時の自分は狂っていたとしか思えなかった。怒り散らしながら少しずつ声がうるんでいくリタを前に、僕はただひたすらに謝ることしかできない。それを取り囲んで見ていた吸血鬼たちからの視線に気づいた彼女は、こっちを見るなど言うように周りを威嚇(いかく)する。たぶん子供の吸血鬼たちだろう、わーとか言いながらぱたぱたと離れていったが、少し遠くから、またちらちらと赤いつぶらな目が見えた。

ほとほと困り果てたように彼女がおおげさなため息を吐くと、僕の右腕を強くつかんで、外に引きずるように歩いていく。乱暴につかんでこそいたけれど、力の加減をしている感じがした。そして僕らは外に出て、まだふかふかに積もった雪を踏み分けて少し上に向かって、そのまま二人で近くの岩に腰を下ろす。雪がまだ降っている。風も冷たい。でも、不思議と寒くは感じない。

「うれしかったんだよ」

僕の口から、白い息とともに漏れた。リタは僕の顔を睨(にら)むように見つめている。

「リタたちにまた会えたこともそうなんだけど、リタ以外の吸血鬼たちに助けてもらえたことが一番うれしいんだ」

ずっと前から、僕の中には一つの願望があったのだと思う。

初めて会ったとは思えないくらいに、僕とリタはすぐに話せる仲になった。それ自体、すごく新鮮で、うれしくて。でも、それだけでは物足りなくなった。ほかの仲間たちとも、分かりあえたらいいのに。いつしか僕には、そんな思いが芽生えていた。手の届く距離にいるのに、彼らはまるで川の向こう側にいるように感じたから。そして彼らも僕のことをそういう風に見て、そういう風に扱ったから。

でも、リタと一緒にいるうちに、いつかその距離が近くなるかと思って、期待したり、失望したり、迷ったりしていたんだ。消臭剤を撒いて睨まれたあの日も、リタの手を取ったあの日の視線にも、僕はきっとそういう気持ちを抱いていた。

だから今、一番に満たされている。僕のことを、ほかの吸血鬼の仲間たちが認めてくれたように思えたから。いつでも僕を殺すことはできたはずだし、見捨てることだって簡単にできたのに、僕を彼らの家に入れてくれたことが、その証明のように思えたのだ。都合のいいただの思い込みかもしれないけれど、それでも僕には十分だった。

そんな感傷に浸っていると、横からの赤い目線に気づく。じっ、と見つめるその視線に、僕は思わずのけぞった。

「私じゃいけないって言うの」

「そういうわけじゃないけどさ」

慌てて返すと、リタは僕から目線を外してふもとの方を眺める。川下の街が随分遠くに見えた。多めに設置された松明が橙色(だいだいいろ)に光って、温かい光を街中に振りまいている。雪雲に月が隠れて、そして松明の光はここまで届かないから、僕は横にいる彼女の横顔を読み取れない。ふんと鼻を鳴らすのが聞こえる。

「そもそも毎日顔を合わせてたしさ。それに、十字架も銀のナイフも松明も持っていない人間なんて、ロウ君しかないってみんな知ってる。敵じゃないって分かっているんだから、誰でもこうしたよ」

「でもそう言ってくれるのが一番うれしい」

僕がすぐに返事をする、リタは驚いたように目を見開いて、そしてくすくすと笑う。その顔が僕には見えないのが、ほんの少しだけ心残り、吸血鬼の持つ夜目が羨ましく感じた。

僕はリタたちが行ってからのことを話した。首都から増援がやってきて、吸血鬼たちが殺されたと聞いたこと。きっと洞窟にいた彼らのことだと言うと、リタはゆっくりと僕から目を逸らして、そっか、と消えそうな声で呟いた。それ以上は何も言わなかったし、僕からも何も言えなかった。像のように固まった僕たちの肩に雪が容赦なく降り落ちる。

自分を責めているんだ。下を向いた彼女の表情が見えなくなると、それくらいのことは僕にでも分かった。一度でも、彼らを止めることができたら、今一緒にここを歩けたはずなのにとって、きっと彼女は考えてる。人間である

僕に言える言葉は何も思いつかなくて、けれど何もしないわけにはいかなくて、無意識の中で僕は、リタの震える肩を抱いていた。気づいたリタがぱっとこっちを向いて、僕は自分の行いに気づいて手を放す。赤い目線が揺らいでいた。

「……元気づけようとしてくれる？」

そのつもりではあったけど、面と言うのははばかりで、それに現に口がぱくぱくと動くだけで声が出ない。リタと僕の目線が重なって、わずかな時間が通り過ぎて、未だ硬直する僕を尻目に彼女が目線を外した。

「ここから動けずにいるくらいなら、人間を殺してあの街を支配して暮らす……人間どものためにこんなところに押し込められるのはたくさんだ……ってみんな言ってさ。街に行くのも止められなくてさ、出てってからいざ探してみても見つけれなくて。……そっか、みんないなくなっちゃったんだ」

リタはまたふもとの方を見つめて、目を閉じた。仲間たちを吊(とむら)うように、思い出を探るように、胸に手を当てていた。変わらずに街は輝いている。川の下流に向かって、いくつもの炎が歩いているのがかすかに見えた。きっと人間たちの見回りだ。

「戦いになんて、いかないよね」

彼女の祈りが終わると同時に、僕の口からぼろっと言葉が出てきて、途端に気づいて口を塞いだ。仲間は人間に殺されたのに、僕は何を言っているんだと。

「いかないよ」

リタはただ一言、言い切る。その答えに、安堵した自分がいた。

「敵を討ちたいって気持ちはあるよ。今すぐにでも。我慢するのもすごく苦しい。でもさ、まだ仲間がいるのに、そんなことはできないんだ」

争わなくてもいいなら、ってリタは以前僕に話してくれた。でも、そう思うのも、きつものすごく辛いことだったはずなんだ。仲間が次々と倒れていって、それでも手を出すななんてことは、どんな人間たちにもできなかったのに。

「ねえ」

彼女が問いかける。か細い声で僕に問う。

「私たちはさ、どうしたらいいんだろう？」

その答えは、僕には分からないんだ。リタに会ってからずっと考えて、それでも答えはでないんだ。きっと誰も分からないから、人間と吸血鬼は戦っているんだろう。リタが求めている答えは、僕の中にはないから、僕が言えることは一つしかなかった。

「生きてほしい」

えっ、と詰まった声がリタから漏れた。

「僕にもその答えは分からなくてさ。でも、リタたちが、みんなが死んじゃうのは嫌なんだ。そう想像するだけで、すごく心が痛むから」

その思いはすごく単純。ただ僕の願望を伝えただけ。でも、僕にはそれしか言えない。

「生きる……か」

虚空に向かって彼女が呟く。一度二度、三度と同じ言葉を、刷り込むように口に出す。そして、最後にそうだ、と決心するように一段大きく声に出して、また僕の方を向き直る。赤い両目が、また僕の視線と交差する。

「ありがと。……がんばる。じゃあ、早くこの山を越えなきゃね」

後ろで手を組んだリタは、僕の後ろにそびえ立つ壁のような山を見つめた。僕にもその山の光景が、そして見据える彼女の姿が、さっきより鮮明に見えるようになっていた。夜の終わりが近かった。

僕らは座っていた岩場から下りて、あの洞窟までの道に戻る。降ったばかりの雪がさくさくと小気味いい音を立てて、足跡の上から新しい雪が補充されるように降ってくる。木々にはつららが何本も張って、その間から見えた川岸は、真っ白になっていた。

「この山は登れそう？」

帰り道に尋ねると、彼女は口元に手を当てて考えるような素振りをする。僕らの間に沈黙がやって来て、足音だけが耳に入る。数十歩進んでから、リタが僕の方へ向き直った。

「分からない。でも難しいと思う」

「どうして？」

「今みたいにちょうどいい横穴なんて都合よくないの。だから、上に行けばいくほど、隠れる場所がなくなっちゃうかもしれない。今まで歩いた森の方がよっぽど楽。最悪地面に穴掘れるから」

まあ嫌だけどねと付け加えながら、土や虫を払うようなしぐさをする。でも、それくらいならまだましなんだ。もし隠れ家が見つからなくて、そのまま朝を迎えてしまったら、彼女も、その仲間たちもみんな死んでしまうのだから。ここまで来ておいて、そんなことにはさせたくなかった。だから、僕はリタに訴えた。

「ねえ、もう一日、ここに居てもいいかな」

そう聞くと、リタは面食らったように、赤い目をぱちくりさせた。えっ、と声が漏れる。立ち止まった彼女は、分かりやすく困惑している。でも、僕の決心はぶれない。まだやれることがあるはずだから。リタたちに生きて向こう側に行ってもらいたいから。

「あの川を、今なら渡れるかもしれないんだ」

日が出ているうちは彼女たちが動けないから、僕たちは洞窟に戻って夜まで待たなければならなかった。増援のこともあるから本当はすぐにでも動きたかったけど、仕方ないとはやる気持ちを納得させた。

夜を待つ間には、リタ以外の吸血鬼たちとも少しだけ会話できた。初めて一緒に食事をした。僕は帰り道に採った木苺しか食べられなかったけれど。こうもりを使って手紙を出す、誰かと約束をした。熊に襲われた僕を、ここまで運んでくれた吸血鬼たちにお礼をすることもできた。その時彼らがどういう顔をしていたかは、やっぱり分からない。それでも、会話ができただけでも大きな進展でうれしいことだった。あれだけ仲良くなりたいと思っていたのに、僕は、彼らのことを何も知らなかったのだから。

少しすると彼女たち吸血鬼はみんな夜のために眠ってしまって、僕は暗闇の中で一人座りこむだけになった。リタも、仲間も、どこにいるのかすら見えなくて、動くと思えば踏みそうに動けない。彼女たちの寝息だけが僕の耳を満すけど、誰のものかも分からない。

最初は少し落ち着かなくて、僕も一緒に寝ようかと思って寝転んだ。けれど、ずっと気を失っていたからか眠りに落ちることができなくて、また起き上がってしまう。それを繰り返しているうちに、僕はまただんだんと慣れてきて、これが当たり前だったような錯覚に襲われる。

そうあってほしかったのかもしれない。

ずっと一人で暮らしてきたから。

父親が数年前に徴兵された。それで稼ぎが減ったから、母親も出稼ぎに行った。一人でも生活できるでしょうと言われて、僕はあの小屋に残されて、何年たっても、両親は帰って来なかった。もう徴兵期間はとっくに過ぎてるはずなのに。出稼ぎでも、一度くらいは帰って来れるはずなのに。手紙の一言すらもなく、ただ母親からのわずかな送金だけが便りになっていた。

何で戻って来ないのか、今でも僕には分からない。何かの事情で帰れなくなってしまったのか、僕を忘れてそのままどこかに行ってしまったのか。理由が何であれ、まだ帰ってこないということだけが小さかった僕にとってはただ一つの事実だった。それは今でも変わっていないかもしれない。

長い間一人だった僕は、きっと家族のような存在を求めていたんだと思う。だから、急な訪問客だった彼女たちを、僕は頑なに追い出さずに、赤鎧たちに売りもしなかったんだ。

リタと話しているうちに、誰かと一緒にいることを思い出した僕は、きっとそれを放したくなくなってしまったんだ。それが人間でも吸血鬼でも誰でもよくて、ただ誰かを求めていて、だから命の危険を受け入れてまで、彼女たちと一緒にいた。僕や人間が襲われることでその時間を失いたくなくて、頑なに彼女との約束を守った。そして彼女たちがいなくなってすぐに、僕は何も持たずに飛び出して、ここに来てしまったんだ。

あの日の「ここに居たっていいのに」という僕の激情は、「生きてほしい」というストレートな願いは、きっと生きていた中で一番の本心だったんだ。

それを認識した僕の体の奥が熱っぽくなって、思わず額に手を当てる。洞窟の中は冷えた空気に包まれているのに、嘘のように温かい。周りはまだ寝息の中。それに気づいた僕は、少しほっとした。

顔に当たった手を体の近くに置き直そうとして、着地したのは誰かの髪の上だった。ん、と寝返りをうち、その髪が引っ張られて、慌ててそこから手を放す。

もし川を渡れたら、今度こそ彼女たちとはお別れになる。彼女たちはまた長い長い旅に出て、僕はまた一人の生活に戻るのだ。また会いに行きたくなって、小屋を飛び出してしまうだろうか。今度こそ、そうはならないはずなんだ。あの川を渡りきることができれば、何かが変わると思うから。根拠はないけど、そう信じ込むことにした。

**60/12/29

結局耐えきれなくなって眠ってしまった僕は、暗闇から伸びる誰かの手によってゆすり起こされた。四方全て真っ暗で、時間も分からない。彼女たちが起きたなら、たぶん夜が明ける少し前のはずだ。周りの仲間たちはあちこちをこそこそと動き回っている。きっと出発の準備だろう。けれど僕には何をしているかが全く見えなくて、動き回っても邪魔そうだったから、ずっと座ったままでいた。

しばらくすると、入口の方で地面を引きずるような音がして、僕たちの意識は自然とそっちに引かれる。横穴を塞いでいた大岩が取り外されて、そこからは、暗くなりかけの空からしんと降りる雪が中に入ってきた。夜の世界がやってきた。

出発する前に、昨日リタと話した岩場にもう一度登って、そこから眼下を見下ろした。今日も炎を携えた集団が川の近くの開けた場所をうろうろと歩いている。

だから僕たちはそれから遠ざかるように山を少しだけ登って、それから遠ざかりながら川の方へと進んだ。先頭にリタが立って、その後ろに僕、そして仲間たちが並ぶ。時間がたつにつれてどんどん視界が暗くなっていて、時々足を踏み外しそうになる。その度に彼女が僕の腕をつかむか、後ろにいる仲間を支えられて、助けられる。一緒に歩いている喜びと、足手まといになってしまっているような現状への申し訳なさが絡み合っていて、じわじわと大きくなっていく。

そうしながら少し歩いて、ようやく川岸にやってきた。人っ子一人来てないのをいいことに、好き勝手積もった雪をかき分けて、僕は川へと歩を進める。反対に、リタたちはその場にとどまっている。彼女たちにとって、流水は畏怖(いふ)の対象だから。

僕はそっと近づいて、手探りで川と岸の境界を探して、そして川の流れの上に立った。やっぱり、凍りついている。彼女たちを置いてその上を歩く。歩く。ゆっくりと、見えない足元に意識を集中させながら歩いて、そしてまた深々とした雪の山に足を突っ込んだ。それを確認して、また慎重にきた道を帰る。また歩いて、彼女たちの元に着いた。まだ夜になってすぐだから、彼女たちの表情が見える。誰一人例外なく、緊張の色を浮かべている。

彼女たち吸血鬼は、流水を渡れない。そんなことは、僕だって分かっている。でも、渡ると即死してしまうというわけではなく、ただ力が出なくなってしまうのみのようなのだ。だから彼女たちは、橋を架けても自力で渡れないし、いかだを作れど自力で操縦できずに漂流してしまう。結局手詰まりになってしまった彼女たちは、あの川の前から進めなかったのだ。

でも今なら、僕が動力になれる。

僕が彼女たちを、向こう岸まで連れて行ける。

彼女たちにはその策を既に説明してある。ただ、川には氷こそ張っているけれど、その下にある流れまでもが凍っているわけではないから、実質的には流水を渡っていることになる。だからきっと川を渡っている間に力を失い、彼女たちはほぼ無力の姿になる。そのことに抵抗する声も少なからずあったけれど、結局最後には一つにまとまった。僕の熱意が通じたとか、リーダーの一声とか以前に、自然と方向が一致したのだ。ここにこのままいても、いつまで生きれるか分からないという焦りや不安が、彼らの声からにじみ出していた。

川のこちら側に戻って来た僕は、集団の先頭に立っている彼女に目くばせする。登ってきた分川下より幅が少し狭くなって、往復したらたぶん十五分くらいのはず。二十人以上いるから、休みなく往復しないと間に合わないかもしれない。でも周りに誰かがいるかもしれない分、できるだけ静かに動かないと。自分で提案しておいて、やっぱり難しいなあと思いをかかす。

とにかく、人間たちに見つかる前に、この移動を終わらせないと。

少し急ぎ足になりながら、僕は差し出された一人目の手を取った。僕を熊から助けてくれたうちの一人の女の子。繋いだ手は暖かくて、そして少し震えていた。もし氷が割れて落ちたら、もし僕が突然裏切ったら。きっとそう思っているだろうから、そして僕自身もうまく行くのか不安でいっぱいだったから、大丈夫、大丈夫と口に出しながら一歩目を踏み出す。そのままゆっくりと次の足を出す。

氷の小さな粒を踏みしめる。ぱきぱきと軽快な音がするけど、それを楽しんでいる余裕がない。汗がにじむ。僕の手をつかむ手の力がだんだんと弱くなっている。氷越しの流れが着実に、女の子の力を奪っていく。何か言葉をかけようかと思いつつも、足元と周りへの警戒で意識が回らなくて、二人は無言で暗闇を歩く。

向こう岸まで半分くらいになったところで、ついに女の子は動けなくなってしまった。だから女の子の力の入らない両足を抱えて、お姫様にするように抱いて歩いた。反対側から歓声が聞こえる。距離があるはずなのに、どこまで見えているんだろう。

そのまままっすぐに歩いた僕たちの体は、凍った床から、ふわふわの雪の地面に着いた。雪の一番柔らかそうなところに女の子を寝かして、僕はまた川を往復する。心配になって後ろを振り向くと、向こう岸で小さく手を挙げているのが月明かりに照らされてなんか見えた。まだ向こう側にはたくさん待っているから、急いで戻らないとはやる気持ちを抑えながら、ゆっくりと、地面を傷つけないように反対岸まで戻る。

そして二人目の手を引いて、向こうに着いたらまた戻る。三人目の手を引いて、向こうに着いたらまた戻る。だんだんと周りを見ながら進むのにも慣れてきた。川下の方からは、まだ光は見えない。そのことに安堵しながら、僕はまた川の真ん中を通過する。

六番目の少年を連れてきたくらいには、初めに渡った女の子がもう動けるくらいに回復していた。先に着いた仲間たちには、今日の夜を明かすための場所の準備が待っている。せつかく渡ったのに日光に行く手を遮られては、この戦いが水泡に帰してしまう。そんな終わりは、ここにいる誰だって望んでいないことだった。立ち上がった女の子と一緒に、僕も気合を入れ直す。

次に手を引いた小さな男の子は、流水への恐怖心でずっと泣きじゃくっていた。大丈夫、落ちないから、と励まししながら、彼を抱いて前に進んだ。

その後引いた男の人は体格がよくて、僕には背負うことができなかった。最後は背中を引きずるような形になって、息をきらしながら向こう岸までたどり着いた。途中からずっと謝りっぱなしだったけど、着いた後、肩に手を置いて許してくれた。

何人も引いて、だんだんと足が棒のようになってくる。始めてから何時間たっただろう。もう分からなくなっていた。

歩く地面から大きな音がして、渡っていた少女と顔を見合わせて青ざめる。怖さを紛らわせるために思い出話をする少年に付き合って笑いをあげる。抜ける力を振り絞った青年吸血鬼と、一緒に周りを警戒しながら進む。何人もと一緒に向こうに歩いて、最後は抱えるか引きずるか向こう側で待っている吸血鬼たちに引き渡す。彼らはもう都合のいい隠れ家を見つけたみたいで、引き渡すとすぐにかついで向こうに消えていく。

疲れはもうピークに達していて、前に歩を進めるので精一杯になってくる。あと何人残っていたかもだんだんとおぼろげになりながら、僕は歩く。繰り返してるうちに、空が少し明るくなったような気がして、さっきよりも早足で対岸に戻って。また次を連れて行って、また帰って。

ついに、残りはリター一人だけになっていた。

疲労困憊(こんぱい)の僕は、何も言えずにただリタに手を差し伸べる。何も言わずに彼女がそれに応じて、僕たちは、共に最後の一步目を踏み出した。じゅりつと地面が音を立てる。月光に照らされて、影が一つになる。

「……間に合いそうだね」

「うん……何とかなりそうよかった」

少し声がかすれた。風もなく、氷を踏む音だけが聞こえる。

「ありがと」

僕の後ろでささやく声が届いて、僕はリタに少しだけ意識を向ける。本当は目を見て話したいけど、僕にはそんなに余裕がなかった。

「吸血鬼のためなんかに、こんなにしてくれて」

「僕にはさ……吸血鬼も人間も、どっちだっていいんだ。ただ、一緒にいたただけなんだよ。ずっと一人がさびしくて、でもリタといた日々が楽しくて、だから、援軍の話聞いて、戦いのことを知って、いてもたってもいられなくなって……」

言葉が、本心がまとまらなくなって僕はぶんぶん首を振る。リタは手を引かれたままで、次の言葉を待っていた。

「結局さ、また会いたくなっただけだと思う」

その言葉は、体のどこにも引っかかることなく飛び出した。後ろでリタがくすくすと笑った。

「だから何も持たずに雪山に来たんだもんね」

「ごめんなさい」

後ろで吹きだすような音がして、振り返って少しだけリタの顔を見た。月光だけではよく見えないけれど、目元が少し濡れているような気がした。彼女はそれをすぐにぬぐったから。

「本当はさ」

ゆっくりと、リタは僕の隣にやってきた。彼女の声も少しかすれてた。

「本当は知ってるんだ。川の向こうにも、山の向こうにも、ここと変わらない世界があるってこと。どこに行っても、私たち吸血鬼と人間たちは嫌いあってるってこと。だって、ロウ君は一度も、私に川の向こうの話をしなかったから」

この国だけが、吸血鬼を嫌っているわけじゃない。どこだって、変わらない。吸血鬼の存在が知られていない、遠い遠い土地に行かない限り、リタたちは逃げ回りながら暮らさないといけない。そして、彼女たちの理想郷がある遠くまで行きつくことが、彼女たちにとっては難しいんだ。でも、そう知っていたとしても、きっとそこに理想への道があると思込もうとしていた。

僕は川の向こうに何があるかを知っている。この国と変わらない国がいくつも並んでいることを知っている。だから、僕はその向こうの話をできなかったんだ。それは、リタのことを思ってたのが、人間たちを、さらに言えば人間である自分に絶望してほしくなかったから。きっと両方なんだ。

そして、その望むものが何もない向こう側に僕は、彼女たちを連れて行こうとしている。山を越えるよりも安全という理由で、死地から死地へと手を引いている。きっと向こうの世界でも、今みたいに彼女たちは迫害にあうかもしれない。この川の向こうにあるのは茨の道だ。

生きてほしいと僕はリタの前で言った。その単純な願い一つが、すごく難しくて苦しいことなのだとなんて実感する。僕の願いが彼女たちにとって正しい道かは分からなくて、それでも願いは変わらなくて。またもやもやとし始めて、それでも疲れた頭は全く動いてくれない。その答えも、リタに伝える言葉の一つも編み出してはくれない。そんな僕に届いたのは、頬をつつく感触で、そこを見るとリタの白い手があった。

「また難しいこと考えてる」

「そういう顔だった？」

「すぐ顔に出るから」

リタが何か表情を作っているように見えて、思わず苦笑いのようなものが漏れた。きっと、さっきまでの僕の顔を真似してるんだ。でも、その表情は暗闇に紛れてよく見えなかった。

「いいんだよ。向こうにもロウ君のような人がいるかもしれないし。ロウ君と会ったら、人間どんなのがいるかわからないって思ったから」

ちょうど川の真ん中くらいまで来た。リタの手からは、力が失われていっているように思えた。だんだん歩みは遅くなっていて、僕の隣から後ろにまた戻って、やがて僕たちは流れる川の上で足を止めた。月の光が川底に反射して、僕はやっと、リタの表情を見つめられた。彼女はさっきの言葉に続ける。

「次の場所がだめだったらまたその先……そこだめなら、またその先。見つかるまで、くるくる回るんだ。ここにずっといたら、それすらできずに、この川の前にはずっといて……いずれ誰かに、殺されてた。……ロウ君が、そのチャンスをくれたんだから、私たちには、お礼しか言えないよ」

息切れと共に発せられたリタの答えが、僕を沼から引きずり出した。きっとそんなに単純じゃないし、本当は正しくないかもしれない、いつか後悔するかもしれない。だけど、今の僕らにはそれでいいんだと思えた。今見える壁を越えて、歩き続けられれば、それで。

なさけない声をあげて、ついにリタは氷の地面にへたりこんだ。僕も一緒にしゃがみ込むと、えへへと照れ笑いを浮かべた。

「歩けなくなっちゃった」

「じゃあ、背中に乗って」

しゃがんで、リタに背を向けた。けれど、リタは僕の背中をグーでぺたんと叩いた。

「あれやってよ、最初にやってた、お姫様みたいなやつ」

お姫様、という言葉に心拍数がさらに上がる。思わずリタの顔を見る。冗談で言っているとは思えなくて、僕はそのわがママを受け入れた。彼女の足と背中を支えて抱いて、そっと立ち上がる。疲れ切った体が悲鳴をあげて、すぐには歩が進まない。その間に、彼女の手が僕の首に回ってくる。向こう岸からは、何も聞こえない。

もしかすると、リタがこんなわがママを言ったのは初めてかもしれない。心配になるほどに彼女は軽かった。その体のどこに、あんな強さが隠れているんだろう。僕に生まれた最後の不思議は、そのまま尊敬と愛おしさに昇華された。

残った川の道程を歩いた。リタがかかる声も、感じるぬくもりも、これが最後になるかもしれない思いながら、必死になって歩を進めた。じゃりじゃりと音がする。視界が少しずつ明るくなっていくような気がして、それが僕の気を逸らせた。その一方で、せめてもう少しだけ、このままいたいとも思ってた。

——ふいに、葛藤をかき消すように、向こう岸がざわついた。

ただの風の音かと最初は思ったけれど、リタが僕の背の方を突然指差して、それで僕はようやく異変に気づいた。思わず足を止める。そっと後ろを向く。

川下の方から、何かが近づいていた。橙色の光を持った集団が遠目に見えた。何でこんなところまで、と耳元でこぼれる声を聞いて、疲れ切った僕の頭はようやく状況を理解する。人間だ。

増援の兵士たちなのか、ただの木こりなのかは分からないけれど、この場に人間がいるということそのものが、危機であることに変わりはない。今の僕とリタでは、見つけれたらどうにもならないのだ。

二人で目を合わせる。そして僕は彼女を抱いたまま、最後の力でどうにか早足で歩を再開する。どうか見つからないようにと祈りながら、音をたてないように急ぐ。対岸で待っていた仲間たちは、森の影に隠れたみたいで、リタが安堵の息をついた。

それでも川下からの光がどんどんと明るくなっていて、ついに僕にも松明を持つ人影が見えた。がっしりとしたシルエットが見えて、それが鎧であることをすぐに連想させる。

でも、もう少しで向こう側に着く。だから大丈夫。そう落ち着こうとした次には、ざわめきがさらに大きくなって、僕たちがいる方向に足を速めて近づいてくる。見つかってしまったんだ。動いたもの全てを敵とみなす、というあの日の白鎧の言葉が想起されて、もう汗でびしょ濡れの僕の顔を、さらに冷や汗が伝った。

ぱん、ぱんと乾いた音がする。遠くからの発砲は、まだここまでは届いてこない。氷の地面に激突して、ぴしと割れる音が恐怖を引き寄せる。人間たちはついに川岸を走りだして、川に入ってくる。まだかなり距離はあったけれど、このままでは追いつかれてしまう。リタの手が服の背をぎゅっとつかんだ。

ざわめきも、時折響く銃声も少しずつ近くなってきて、僕は残った全てを足にこめて前に歩く。まだ追いつかれる距離じゃないと分かっている、距離以上の緊張が襲ってくる。その感情を全て無視しようとしながら、僕の足はゆっくりと前に進む。

彼女に生きてほしいと言ったのは僕だ。だから彼女は生きないといけない。

そして僕は、生きた彼女にまた会いたい。

足だけに集中した僕に唯一伝わっていたのは、彼女が僕をつかむ感触だけ。その感触が、そこから伝わる体温が、迷うことなく決意を燃え上がらせる。鉛のようになった足を、また一歩前に出す。

瞬間、地面が揺れた。

何かが衝突したかのような轟音。追ってきていたはずの兵士たちの悲鳴。揺れに耐えきれなくなって膝をついた僕は、すんでのところでリタを放さずにすんだ。あれ……と彼女の力ない声が聞こえて、その指す方向に目を向けると、氷が張っていたはずの場所には、何本もの大木が投げ入れられていた。

叩きつけられた大木の衝撃は、周囲の氷を砕き割っていた。突然足元を失い水中に投げ出されて、鎧の重みも相まって身動きが取れない兵士たちに、さらに容赦なく何かが投げつけられる。僕にすら、彼らが混乱していることは理解できた。その間にもう一度立ち上がって、しっかりとリタを抱き直して、また川の向こう側に進み始める。さっきので地面がさらに脆くなっているかもしれないから、より慎重に足元を見ながら歩いた。

「ロウ君、人間、みんな逃げたみたい」

ささやくような大きさの音が聞こえて、僕は意識を川下に戻す。川に落ちた兵士たちはそのまま逃げてしまい、川岸に残っていた人間たちの松明も、少しずつ遠くなっていた。そのことに僕はようやく安堵して、全身の力が抜けそうになる。それを慌てて立て直して、また力を全身に入れ直して、また歩く。ずっと川の上にいるわけにもいかない。彼女は吸血鬼なのだから。だから残りの行程だけを見て、僕はひたすらに、無言で歩を進める。

「大丈夫だよ」

ふいに、彼女の声が聞こえた。前方に釘付けになった視線が外れて、彼女の顔だけをまじまじと見つめる。

「私も、みんなもきっと、人間みんなを嫌いになったわけじゃないから」

僕の足が止まる。

「でも、リタは今襲われたばかりだよ、なんでそんなことが言えるのさ」

「それはね」

彼女が体を持ち上げる。そして顔同士が近くなって、リタの音が鮮明に響いた。

「少なくとも君のことを、ちゃんと信用してるからだよ……ロウ君」

彼女はそれ以上を言わなかったけれど、僕にはそれ以上の答えはなかった。さっきまでの僕は、人間たちに襲撃されたことで、彼女たちにまた背を向けられるのが怖かったんだ。だから、僕はリタに何も言うこともなく、歩いていたんだ。

それが分かった途端に、視界がにじんだ。ほっとしたような感情と、少しでも疑ってしまったことへの後悔がぐちゃぐちゃに混ざって、涙と一緒に吐き出される。動けなくなった僕のまぶたにリタがゆっくりと指を当てて、その涙を拭きとった。やっと戻った視界には、もうくっきりと向こう岸に待つ仲間たちが見えていた。

もう、夜明けが近い。

彼女の顔を見ながら、また一歩目を踏み出した。もう周りにざわめきはなくて、二人だけの世界のようにも思える。歩幅が随分と小さくなって、歩いても歩いても、なかなか向こう岸に近づかない。もう、心身共に限界が近づいていた。

「……ねえ」

それでもリタからの問いかけは、へろへろの体にきちんと届いて、僕の意識は覚醒する。僕を見つめる赤い両目を見ながら、なに、と聞き返した。

「この川を渡ったら、ロウ君はどうするの？ ……もしかしてまたついてくる？」

リタももう力が抜けきってしまっているのをごまかすように、わざといつもの無邪気な調子を作っていた。僕はその答えをもう用意している。向こう側に着いたら、伝える予定だったから。

「やめとく。こっちで一緒に過ごして分かったよ。僕がいても邪魔になっちゃう」

一人で山に入っては熊に襲われ、誰かに手を握っててもらわないと夜の道を歩けない。隣にいる彼女の顔すらも、暗闇の中では鮮明には見られない。

この二日で実感してしまった。僕は夜の世界では生きられない。僕とみんなは、一緒に旅をすることはできないことを。

本当はなし崩しで同行しようとする考えで、僕はあの小屋を出てきていた。一度会ったら、また離れたくなくなってしまうとも思ってた。でも、僕の存在が足手まといになってしまうなら、それでリタたちが危機に晒されるなら、僕はそこにいない方がいい。だから。

「あの小屋で待ってるよ。もしいろんなところに行って、それでも求めるところが見つからなかったら……その時は戻ってきて」

時間もないのに、僕は歩みを止めた。立ち止まって、彼女の顔をちゃんと見つめて、全ての意識を彼女に向けて、僕はその思いを伝えた。

「うん……分かった……」と、力が尽きてとろけたような笑顔で、その声が確かに届いた。それと同時に、僕たちは最後の一步を踏み終えて、雪の上に彼女ごと倒れこむ。もうすぐ朝になってしまう。リタたちの時間は終わってしまう。

近くにいた仲間たちが、リタを急いでおぶさった。横を通り過ぎた吸血鬼が、ありがとうと呟くのが聞こえた。近くの岩にもたれかかると、おぶられたままこつちを向いたリタと目が合った。

何も言える気力がなくて、お互いに小さく手を振った。そして一緒に小さく笑った。

彼女たちの後ろ姿が小さくなって行って、やがて視界から消えていった。僕の体に残ったのは、大きな疲労感に、鉄の棒ようになって動かない足、働かない頭、そして、彼女たちを送り届けられた心地よい満足感と安堵。そしてほんの少しだけの喪失感。

明日からはまた一人になって、もう一度会えるかどうかは誰にも分からない。一人で生きるには広すぎるあの小屋は、僕をきっとさみしくさせる。でも、最後にあの顔を見られて、それをずっと覚えていられる。どれだけさみしくなっても、リタのあの笑顔を思い出せる。生きていれば、また会える。だからきっと、僕は平気だ。

ずっと動かないわけにはいかない、ここから帰らなきゃと体に活を入れる。ぷるぷると全身を震わせながらようやく立ち上がって、また凍った川を来た方向に帰る。太陽が山の影から出てきた。まぶしさに目を細める。きっと彼女たちは間に合っているはずだ。だから僕がすることは、いつでも帰ってきてもらえるように、生きることだけ。肩に乗せた彼女の黒い上着が、朝一番の風で強くなびいた。

**65/12/22

生誕祭の近いその日、ちらちらと雪が降り始めていた。きっときれいに積もるだろう、そう思いながら外を見る。街は光に包まれて明るく、夜なのに活気が溢れている。彼女たちがここに来てから、夜の街が以前よりずっと明るくなった。もっとも、警戒態勢でというよりは、ずっと明るくしていることに慣れてしまったからだという。街に漂う安穏な空気にほっとすると同時に、少し身勝手な感じもした。街も川も、そこに住む人も、忘れてしまったかのように変わらないから。

そんな景色を眺めていると、急に視界が真っ暗になって、僕は驚いてたたらを踏んだ。誰かがいたらきっと笑われるけれど、この小屋には誰もいない。ろうそくを持ってきて暗闇を照らすと、窓に大きなこうもりがびたっと張り付いていた。足には白い紙が巻き付いている。

——リタからだ。

彼女は去った後、新しい街に着く度にこうもりを使って便りを送ってくる。たまに二枚ついている時は、子供吸血鬼たちの落書きも一緒だ。そしてそれを読んで、手紙を書いてまた足にくくりつけると、こうもりは彼女の下に帰って行って、それを届けてくれる。

最初に来たのは、あの川での別れの後のことだった。人間たちに疑われていないかという心配そうな文章が足のあちこちに結ばれていて、こうもりが飛びつらそうに飛んできたことを覚えている。僕も吸血鬼だと思われていたのか、疑われるようなことはなかったから、僕にとってはありがたかった。そのおかげで、僕はここで待っていられる。

すぐに窓を開けて、こうもりを居間の中に迎え入れると、服かけのところにさかさまに止まる。ゆっくりと近づいて、丁寧に足に巻かれた手紙を取る。橙に輝いたろうそくを手元に持ってきて、それを開く。読む。二度、三度と読み直す。思わず頬が緩んだ。

明日には出かけよう。だから今日は準備をしよう。はやる気持ちはどうにか抑えようと、なぜか居間の中をぐるぐると回る。足取りが妙に軽い。今ならどこにでも行けそう。でも、気のままに飛び出すと、また怒られてしまうから、どうにかして気を静めようとする。

あれから五年がたった。また話したいことがたくさんできた。君が去ってからのこと。僕が何をしていたか。街がああ後どうなったか。それに、君からもたくさんのお話を聞きたいんだ。

やって来たこうもりはやっぱりろうそくがだめなのか、翼で顔を隠していた。その下には、擦り切れてぼろぼろの、黒い上着がかかっていた。あの日彼女がここに置いていったものは、今の僕には少しサイズが合わなくなってしまった。これも一緒に返しに行こう。

彼女たちが今どこにいるかは分からない。きっと、すごく遠くにいて、僕の中で一番大きな旅になる。だけど、見ず知らずの場所に行くはずなのに、困難で不安になってもいいはずなのに、そんな思いは微塵も表れてはいなかった。どうしてなんて考えなくても、理由は分かり切っていて、ただ朝が待ち遠しいという思いだけが僕を満たしていた。

『探していた場所を見つけました。いつか来てくれませんか？』